始

325-224

帝國圖書館藏

人を導く人

エス・デー・ゴルドン氏靜話
千葉勇五郎譯

大正
3. 7. 2
内交

此書は、日本基督教興文協會より發行するものなり。而して本協會の事業は下文に定むる如し。

『基督教興文協會の事業は、日本の基督信徒及び未だ基督教を信ぜざる人々の需要に適したる基督教文學の著作及弘布にあり。本協會は日本に在る基督教ミッションの同盟を代表せるが故に公同的精神を以て立てるものなり。されば本協會の會員及び維持者は必ずしも本協會に於て發行せる書籍に現はれたるすべての意見に同意せるものと認むべからず』。

至情

カルバリー描寫の最初のもの

愛情

母の愛

創世記の描寫

神己を與へ給ふこと

神の友

創世記の透し文字

人情より見たる神情

求愛の使ひ

世を思ふ耶蘇情

至情

カルバリー描寫の最初のもの

神の御胸に熱情が燃えて居る。それはまことに温かで而も至つて強い、其火勢は衰へることもなく、其光輝は薄ぐこともない。それは何かと云ふに神が人を神の家庭に立歸らしめんとし給ふ心情であつて、此温熱の範圍は廣く全世界の人類に及んで居る。

人類が神の懷かしき家庭を出でゝよりこの方、家族の團欒は破られ、樂しかりし爐邊は至つて寂寥を感ずるやうになつた。されば神は人人が歸り來り此懷かしき家庭の團欒を恢復し、再び聲を合せて家庭の歌を唱ふるに至るまでは決して心に安じ給はないのである。

此情は神の胸中に蟠る一入熾なる情であつて、人類に對する神の思

想と計畫とは皆始より此情の指導と支配とに動かされたのである。人即ち全人類を引返さんとし給ふことは、今も神の御苦心の種子となつて居つて、之が爲に萬事は皆犧牲にされて居るのである。

昔エデンの悲劇が此古き聖書の紙面を暗黑ならしめ、亦人生の局面をも更に暗黑ならしめた時に當り、神の胸中既に此至情の一大閃光が煌めいて居つたことは當時神がエデンの諸門を守り給ひしことによりても知らる。見よ、其所に焔の劍を持てる天使の居つたのは明かに人類が神の懷かしきエデンの家に歸り來るべき日を告げるのであつて、又神は此日の爲に園の守備を嚴重にし給ふたのである。

此情は愛情、即ち愛の情である。愛は人の胸中に於けると共に神の胸中に於ける至情であつて、是程人の心は更なり神の心をも把握し、充足し、左右するものはない。

神の此驚くばかり熾なる愛情の最大の繪畫が十字架上に見らるゝは吾々一同が容易く首肯する所であらう。此物語を知つて居る人々は皆、其處に啓示されてある愛の前に帽を脱ぎ頭を垂れて居る。勿論人々は其眞意を悟らず、又それに就いて爭論をも辭さなかつたが、他の如何なる物語、如何なる繪畫にも勝りて其愛と力とを之に認めて居る。

耶蘇は何故に死に給ふたか、其死が吾等に如何なる影響を有するかなどのことに關しては人々の意見がどんなに異つてゐても、十字架の活劇は、愛に就て古來人に示され又知られたる最大の啓示であると云ふことだけは異口同音に一致して居る。人々がカルバリー山上の磁力に引付られて一度その絶大の愛に觸るゝに及んでは贖罪に關する管々敷學說などは忽ち四散して了ふのである。

十字架の大活劇は驚く程鮮やかに豫表されて居る。創世記の第一

章に於けるよりも愛、即ち神の愛情に就いて更に明瞭に又活々と示されてある所はどこにもない。十字架の後幕は更に濃き色彩を用ゐ、黒は其墨色殊に黒く、赤は益々深紅に、其對象は驚く程鮮やかであるが、福音書の十字架の章に記されたるものは皆舊約書の第一頁に充分に含蓄されて居るのである。併し其充分なる意義を明らかにせんが爲に十字架の光に照して吾等の目を開く必要がある。請ふ之より少しく此事を調べて見よう。

愛情

諸〳〵の情の中で最大のものなる愛と呼ばるゝものは如何なるものであるか、此言葉ほど滿足なる定義を下すに困難なるものはない。なぜかといふに此情に就いて何事かを云はんとすれば、先づ諸君が心の内

に愛する人の事を思ひ起すか、又は何人かに對して胸中に此情の燃ゆるを覺えるのであらう。されば愛は如何なるものであるかを説明せんとせば、どんな人のどんな言葉を使つても、到底諸君の心の内奥に潜んで居る愛そのものを充分強く充分和かに書き表す事は出來ないのである。

されど之丈は云ふ事が出來ると思ふ――愛は他人に向つて心のあらん限りを柔しく且つ強く注ぐ事である。愛は人に向つて心の内に燃ゆる火である、心の内に靜かに燃ゆるも尚烈火の如き情である。其人の名を呼ぶ毎に火焔を煽動して新たに燃えしめ、其人の事を一寸思ひに浮べたばかりでも、尚焔に新鮮なる空氣を通じて、其火焔を益々熾ならしむるのである。且つ其人に親しく接するは恰も更に火焔を強からしめ新たならしめんが爲に酸素を供給せんとて、つもれる灰をかき

去り、空氣の流通をよくするが如きものである。

外にも愛に似たものは多い。親切、友情、若くは更に强烈なる感情を指して愛と云ふ事があるが、之等は愛に似たものであるが愛ではない。之は其温熱に於て又は其色彩に於て多少通ふ所があるかも知れないが、實物ではなく遠き血族に過ぎない。

實に愛は貴族であつて極少數者か、或は唯一人のみを許して其内奥に通すのである。愛は、又愛の眞髓は私慾ではない。人生の坂路に於て愛と云ふ純金はまゝ劣等なる金屬と混合さるゝ事がある。時には鍍金のものもあれは混和物もある。時には愛と云ふ外衣の下に全然私慾であつて、外見の粗なるもの、或は一見美はしきものが潜んで居る事もある。併し此混りものは愛ではない、却て之を汚すものであつて、之は人生に罪あるが爲に暫くの間受ざるを得ない侮辱の一種である。

毒草も毒蛇も等しく生を太陽に受けて居る。太陽が毒や有害なるものを生ずるのではないが、此等は善良にして純潔なる太陽の力を己が惡しき性質に變ずるのである。

愛と云ふものは決して卑しきもの、惡しきもの、又は私慾につけるものではない。己が終生の伴侶となさんとして心から婦人を愛する男子は私慾の人ではない。婦人は單に自分の爲に求むるのではなくて、其女の爲にし、之を護り、之を勞はり、愛の光の内に其生命を充分に發揮せしめんと努むるのである。之は愛を理想化したもので實際を離れたものであると考へる人があらば、どうぞ眞の愛は愛する人の幸福の爲に一所になる事を拒む場合もあるといふ事を記憶せられんことを願ふ。

吾等の知る最美最高の愛は如何なるものであるか、人と人との間に

啓示さるゝ愛に色々の種類のもの様々の程度のものがある。夫婦間の愛、子に對する父の愛、子に對する母の愛、同一の兩親より生れたる子供相互間の愛、即ち兄弟姉妹の愛がある。又愛といふ同じ言葉が、血族關係を離れたる朋友の間にもつかはれ、或は愛國心、即ち己が屬する國に對するの愛などがある。更に又人と人との關係を全く離れて、或特別なる物に對する愛着の念、即ち音樂を愛するとか、或は職業を愛するとかいふ場合もある。

以上は樣々の愛を論理的の順序に排列したのである。勿論吾等の經驗によれば、初めに知るものは父と母との愛であつて、それから段々他の愛を知るに至り、遂に吾等自らが父たり母たるの愛を他人に注ぐに及んで其絶頂に達し其圈線を全ふするのである。

母の愛

以上に掲げた諸種類諸程度の愛の內で最も高く最も美はしきものは何れであるか。之に對する諸君の答案は諸君の經驗の異なるに從ひ、他の事物に關する吾等の思想並びに答案に於けるが如く、色々樣々であらう。子供といふ子供は母を持つて居り、又持つた事があるに違ないのだが、幾千人の子供は母の愛を知つて居らぬ。

或時予はニューヨーク市に於て、聖書の中に澤山ある、神は母であるといふ觀念に付いて話をした事がある。其時にジプセー・スミスといふ英國の傳道者、此人は幼き時に母を失ひ、一入慈愛に富める父に養はれた人であるが此傳道者は柔さしき飾りなき言葉にて、自分は神を母と呼ぶ事は出來ない、自分は神を父と認めて居るとて、神の父たることを說き、人々の心を穿つ樣な話をした事がある。

多くの場合に於ては血族以外の人に接するに非ざれば愛は胸中に湧いて來ない。幾多の婦人は己が半身となるべき男子が來りて其胸中に之を喚起するにあらざれば愛を知らないで居る。

併し大抵の人々に向つて問はゞ異口同音に吾等が知る人間最大の愛は母の愛であるといふのである。更に何故そう考へるかと反問すれば、其理由は母が一番に多く己を與へるからであるといふ。母は自分の生命を與へる。必要に迫られれば己が生涯の一切のものを犧牲とし、生命をも犧牲にする。其子の成熟と發達の爲めには死をも厭はない。他人の生命を與へんが爲に己が身をも與ふるは母心である。

母は新しき生命の來らんが爲に自分の生きた血をも與へる、又必要の場合には新しき生命を生かさんが爲に己が生命を殺す事をも厭はない。のみならず己が子に生命の力と芳香とを與へんが爲には一生

涯に亘り時々刻々己が生命を與へる。

上述の通り、母の愛は人の胸中に往來する最大のものに相違ないが未だ之を以て充分に發達した完全な愛であると云ふことは出來ぬ。人間の單位は一人の男子でもなければ又一人の女子でもない、むしろ一人の男子と一人の女子とである。完全なる愛が其成長を全ふせんが爲には一人以上のものが必要である。其充分なる深さと意義とを引き出さんが爲には三人の者が結びつけらるゝにあらざれば、それが勢一杯の力を發揮し、馥郁たる清香を放ちて存在するに至る事は出來ぬ。

先づ二人のものがあつて、其心と心とが愛に於て全く結付られ琴瑟相和し、意氣相投合する愛を相互に見出さねばならぬ。斯くて一方の愛は他方の愛の暖かなる光に觸れて成熟を遂るのであるが、更に第三

者が必要である、即ち之は兩者の愛の結果として生ずるものであつて、兩者の愛を不斷に引出すものである。

愛は創造的のものであるからして自らを滿足し自由ならしめんが爲に其相手を求めて止まないのである。其相手は自分と同種類の者、同等の者でなければならぬ。然らざれば滿足しない。されば愛は自分が其人に注いだと同量のものを、又其人より自分に汲取るのである。愛は慕ふのみではない、創造するものである、否創造しなければならぬのである。愛は生命即ち其一切の能力と一切の特權とに於て、自分と等しき生命を生まなければ止まないのである。茲に愛の眞生命の充分なる發揮が存するのである。

併し之等の事を一言に括れば、つまり、一寸前に云ふた諸愛中の最も高きもので、又最大なるもの、即ち母の愛といふことに歸するのである。

母の愛は、吾等人間に於ては、通例女に於て最も美はしく現はれて居るが必しも女に限つたものではなくして、之に男女といふ性の制限はない、只之は最も圓滿にして最も高く、最も自由にして最もやさしき愛である。愛をして其心の向ふがまゝになさしむれば他の者に生命を與へるのである。之が愛と呼ばるゝへんが爲に己を與へ、又其生命を與へるのである。

大なる情にして諸情中の最大なるものである。

創世記の描寫

時に、創世記の第一章から隨分ひどく横道に走つたと思はるゝかもしれないが、そうではない。吾等は其眞髓に達せんが爲め、最短の道を眞直に急き足に歩ゆんで來たのである。之から聖書の初頁に記されてある神の描寫を一見しよう。

茲に二つのものゝ創造が畫かれてある。一は人の住家なる地球の創造であつて、もう一は其住家に入るべき人の創造である。はや此處にそも〳〵の母の愛がある。新しき生命が將に生れんとするや母は住家の準備に忙はしい、即ち母は愛の智慧を搾り其かよわき手のあらん限りを盡し最良、最軟にして最も住居に適する家を造らんとして居る。鳥が巣を造るは此母たる本能の發露したものであつて、又風の日も雨の夜も厭ふことなく、只管に其卵を抱いて雛鳥の來るを待つの忍耐は如何ばかりであらうか。

聖書は神を母と呼んでは居らないが、此處に於けるが如く、母にあたる言葉を神に對して使つたのは頗る多い。神の事を云ふに人の事を以てするは不充分たるを免れぬ。さりながら神は如何なるものであるかを多少なりとも正確に知らんとせば幾多の言葉を使ひ、又人間相

互の關係の樣々なる方面の事柄に關する最良の意義を聚めて一丸としなければならぬ。高き平面に於て神に對して云ふ父といふ言葉は吾等人間に取りては父といふ意味と母といふ意味との兩者を含んで居る。

父といふ言葉を神に適用するに當つては吾等が知れる限りの美德を聚めたる父といふ意味ばかりでなく、尙又吾等の生命に清香を吹き入れ呉れたる母といふ言葉の意義をも含んで居る。

吾等は通例母といふ言葉は父といふ言葉よりもやさしき言葉であると思つて居る。勿論幾多の男女がやさしい父を有するが爲に父といふ言葉が彼等に取りて却て柔しく聞えるといふ經驗を、問はず語りしたのを聞いた事がある。通例父は强くして嚴そかなる性質を表はし、母は優美、温順、柔和にして軟らかなる性質を顯はして居る。

神己を與へ給ふこと

創世記の物語なる地球の創造、並に地球に生命を與へんが爲に太陽系全體の創造は、神の胸中に於ける此熱烈なる愛情が外に現はれたるものゝ抑の始である。諸君がもし此初期に於ける神の愛を更に深く含味せんとせば今暫く此地球と云ふ人類の住家を見られよ。地球は罪の不淨の爲めひどく汚染され破損されたにも拘はらず、尙ほ其美觀と其豐穰とを維持するは驚嘆すべきではないか。罪惡の汚泥と纏綿とが之に入らなかつた其前は、どんなに立派なものであつたらう。併し之は別の話になるから、今茲で論ずる譯にはゆかぬ。

住家が出來上つた後、神は豫て目論で居られた新生命を生じ始められた。且つ之を生ずるに當つては、吾等人間若くは他の生物の父母に於けると等しく―神は己の幾分を之に與へ給ふた。彼は己が生命の

氣を人に吹き入れ給ふたのである。神は親しく其生命の溫熱と活氣とを以て新生命を起し給ふた。新生命は即ち彼の一部分である。

『其鼻に噓入れたまへり』といふ句は身體と身體とが極近く接觸する意味を有つて居る。兩者が親密に相接し、一方の生命は他の一方に通ずるのである。エリヤが其溫かな身體を延し寡婦の息子を抱きて生命の氣を吹きかへらしめた事を自然心に思ひ起さする。之と一對の話はエリシヤが子供を懷き其貴い小さい身體に生氣が再來するに至るまで口と口と、目と目と、手と手とを合せて介抱した事蹟である。

之を讀んで、これは神の御事を語るに餘り平易、通俗に流れて居ると思ふ人があらば、宜しく之は此貴い聖書の書き方であるといふ事を記憶すべきである。神の愛を知り、又神が我等に接し給ふことの驚くばかりの親みと溫かさとを知るの道は之より外にはない。

神に關する明瞭にして徹底した考を得ようとせば神をどの樣に言表したらよからうか、なぜ聖書の例に習はないのであらうか、それに優る途はあるだらうか。聖書はいつも我等が人間同志の間に使ふ言語を用ゐて神の事を語つて居る。學者等は難解な言葉を好むものであるから、聖書は擬人的であるといふ。それはつまり神の事を語るに人の言葉と事物に關する人の觀念とを用ゐるといふ意味に過ぎない。聖書は人が知らざる所の神の事を語るに、人が容易く了解する通俗の言葉と觀念とを用ゐて居る。之に優つてよい方法はあらうか。之に依らないで如何して人が神の事を了解する事が出來ようか。

敬虔に富める尊敬すべき人々の內に、さやしい通俗の言葉を以て神の事を語るは畏れ多いと思ふ人々もある。此人々は思ふ神の事を語るに日常生活の普通の言葉、即ち家庭の言葉臺所の言葉、市井の言葉、商

賣の言葉などを用ゐるは崇敬の念を缺くやうに思はるゝと。此人々は之が普通の人々の言葉であるといふ事を忘れて居るのであらう。此古い聖書に使つてあるやうな、むき出しの通俗な言葉を用ゐない人があるだらうか。又人々の記憶に留まり、心情に入り、宛も牛蒡の實の附着して離れざるが如き印象を與へたる書は他にあらうか。神が人の鼻に生命の氣を噓入れ給へる事は、力と思想と心情を一心不亂に集中し給へることを思ひ起さしむる。生氣を吹き込むに當り神の心情全體が人間に向つて傾注されたのである。

神の友

神の胸中の御考は人を**己が如きもの**となさんとの事であつた。されば再三再四特別に力を入れて、人は神の像、即ち神に似たるものたる

べしといふ事が反復されて居る。人が神の一部分とならんが爲に神は己を與へ給ふた。茲に愛情即ち母の情、父の情が最高の發現をなし、又その最も美はしき働きをなして居るのである。人は神と最も親密なる友情を保たんが爲に、その最良の一部分たるべきであつた。兩者の間に此特殊のものが共通になつて居るのでなければ眞の友情を保つことは出來ぬ。人は**神の友**、即ち神の最も親しき協同者であつた。

諸君が神の愛情に關する創世記卷頭の物語を熟讀されれば、次の事を認めらるゝであらう、即ち必要の場合、神は其愛子なる人間の爲には如何にカルバリの山は嶮しくとも之に登るを厭はず、如何に十字架の釘は戰慄すべくとも之に打たるゝを辭し給はぬ。

此愛情の衰ふることはない。如何なる事變も愛の富源を盡すに足らず、如何に大いなる危難にも、如何に憂慮すべき急場にも應ずべき手

段は豫め愛の備へる所となつて居る。何か事に際して愛が試みの打擊を受け、至つて辛き經驗を嘗ることがあらうが、それでも決して愛は敗北するやうな事はない。危險は如何に大なりとも、愛はそれよりも更に大いなるものである。敵は如何に強く迫るとも、愛は、いつも、更に強きものである。毒牙の穿つ所がいかに深くとも、愛は更に深きに徹し、其新しき生命の血を以て有毒素を中和するのである。

諸君は一滴の水中に燦爛たる太陽を視られた事があるであらう、丁度その樣に此聖書の第一葉の一語の內に天地創造全體の物語否寧ろ福音の物語全體の鮮やかなる映象が含蓄されて居る。

視られよ、其明白なる紙上、急坂なる小山の頂に、茨の冠を戴き、苦痛と屈辱との極なる十字架に晒されて居る人が見える。それは第一章第二節にある『覆ひ』といふ言葉である。此言葉の眞意は愛を以て震

ひ覆ふといふ意味である。

創世記の透し文字

此に譯された『覆ひ』といふ言葉は英語では Brooding であつて、之は母の心情を表はす言葉である。雌鳥は其翼にて卵を覆ひ己が身體の生命の暖氣にて新生命を生せんが爲に終日終夜勤めて倦むことを知らぬ。神より與へられたる最も神聖にして最も大なる務めを盡す婦人は、創造力と愛とに於て神に最も近きものである―人間の母は永き月日の間來るべき子供の爲に己が生命を與へて誕生の危險が來るの日まで覆ふて居る。のみならず母は新生命の成就を見んが爲め永き歳月の間尙覆ふて居る。實に此大文字が茲に使はれて居るのである。

偖て、此言葉が使はれて居る連絡を更に注意せられん事を願ふ。神

の靈が覆ひ給ひしは、地が『定形なく曠空くして黑暗淵の面に』あつたからである。ヘブル語の學者等は此處の意味に就て說を異にして居る。或る人々は『定形なく曠空く』は創造の道程の一階段を示すに過ぎないと考へて居る。

併し、他の人々の主張によれば之等の言葉は明白に何等かの禍が發生したことを指すのであると。其人々の考によれば創造の物語全體は此章の初めの十語にある、それから少し連絡が切れ、次に二節に神の覆の事があり、又此章の殘りは全體の事柄を再說したのであると。此種のヘブル學者中の或人々は之を譯して『地は定形なく』、即ち『敗滅』、若しくは『住むものなし』になつたとするのである。

若し斯くよまば此『覆ひ』といふ言葉に新意義を充分に與へる。即ち茲に愛は單に生命を與へるのではなくて、禍を恢復せんが爲に之

を與ふるのである。覆ふ事は破損を繕はんが爲であつた。愛を創造するもの又救ふものである。愛は大い、なる忍耐を以て身を屈し、最良の洗淨水を以て汚穢を洗い去り、斯て清められ贖はれたる者として其人を伴れ來るのである。

愛は眞に創造するものである。愛は己が欲する所を自由に選擇する力を人に與へた。救の愛はそれ以上の事をする、即ち正しき事、只管正しき事のみを選ばしめんと人に哀求する。人の目は暗み、その意志は惡しき選擇の常習に由りて、ひどく曲りたる時にも、尙此愛は其側に跪き人をして正しきを選ぶに至らしめんが爲に熱心に努めて止まないのである。愛は選擇の力に於て吾等を神の如きものとする。それのみではない、更に大いなる業をなさしむる。愛は、正しき事のみを選ばんとする願と、それを選ぶ力とに於て、吾等をして更に神の如きも

のたらしむるのである。此等の事が皆『覆ひ』といふ言葉の不思議なる意味の內に含まれて居る。

カルバリーに於ける犧牲の物語全體は啓示の此不思議なる第一葉に含蓄されて居る。若し四福音書を失つてしまつたとし、又其內に書いてある物語や人々の傳記を知らなかつたとしても、必要な場合には此創世記の初頁を見て、人を救はんが爲、神は如何なる苦痛をも忍び、又其生命をも與ふるを辭し給はぬ事を知るに可い。約翰三ノ十六が創世記の第一章にあり、カルバリーが天地創造の記事の中にある。神は創造に於て其人に神の氣を與へ、カルバリーに於て其人に神の血を與へ給ふた。神が其血を與へ給へるは先きに其氣を與へ給ふたからである。どちらも神の眞生命であつた。

諸君は出版業者が透しと稱へて書籍の用紙に文字を漉き込むを知

らるゝであらう。紙を製造するに當り巧に水を應用して文字を漉き込み出版業者の住所姓名などを表すのである。

諸君は神の書籍の此第一葉の紙に漉き込れたる神の透文字に注意せられたか、聖書を取り、此第一葉を飜へし、之を光の前に掲げて其文字を透し視られよ。カルバリーより照す所の光は最も之を視るに適して居る。諸君は其處に漉き込れたる透文字を明かに見らるゝか。請ふ綿密に周到に視られよ、其處に必ず見える筈である。十字架が鮮かに漉き込んである。更に諸君が一層注意して視らるれば、此透は普通のものと異つて、それははつきりと赤い血の色彩を帶びて居る。

人情より見たる神情

吾等日常生活の事物を採り來つて神を說明するは到底不充分たるを免れぬ、されば之を爲すに當りてはあまり批評的に考へてはならぬが、時には之が手に採るように感せられて大なる助となる事がある。

數年前ニューイングランドの牧師の口より實際にあつた話を聞いた事がある。其は予に話した人と同宗派に屬する牧師で、同一都市の敎會を牧して居つた人に就いての話であつた。

此牧師に、學校に通つて居る十四歲ばかりの息子があつた。或る日此子供の先生が訪ねて來て父に問ふた。

『御子息は御病氣ですか。』

『否々、なぜですか。』

『今日學校に御出になりませんでした。』

『そうですか。』

『昨日も。』

『ほんとうに。』

『一昨日も。』

『ええ。』

『御病氣だらうと思つて居りました。』

『いえ病氣ではありません。』

『一寸其事を御話いたして置きたいと思ひまして。』

其所で父は禮を述べ、教師はかへつてしまつた。父は坐つて自分の子供の事と三日間の事とを考へて居た。間もなく足音がした、父は子供がかへつて來たと知つたから、彼を戸口に迎へた。子供は親の顏を見、父は三日間の事を知つて居ると悟つた。

父は『太郎、書齋に御出で』といふた。

太郎は從ひ往き戸は閉された。

それから、父は極く靜かに言ふた『太郎、先刻御前の先生が家に御出になつた。御前は今日も、昨日も、一昨日も學校に往かなかつたといふお話であつた。家ではお前が往つたものとばかり思ふて居たのに。お前も往つたやうに思はせて居た。之に就いて俺はどんなに悲しく思ふかお前には解るまい。いつもいふ通り俺は太郎を信じて居つた。いつもお前を信じて居つた。然るにお前は三日間全く欺いて居た。俺がそれに就いてどの位悲しむかはお前に解るまい。』

靜かにこんな風に話されるのは子供に取つて苦痛で堪らない、反へつて父が亂暴な言葉を使ひ、物置か家のうしろに伴れ出して呉れば子供に取つて其程苦痛ではなかつたらう。

それから父はいふた『跪いて共にお祈りをしよう』と。太郎の苦痛は益々甚だしくなつた。太郎はまだ祈をする心にならなかつた。

大抵の人はこんな時に祈をする心を起すものではない。

それから兩人は相並んで跪き、父は眞情をこめて祈つた。子供は耳を欹だてた。所が太郎は此迄見たことのない自分と云ふものが此膝の鏡に映つたのを見た。此膝と云ふ鏡、又それに映る所のものは實に不思議なものである。多數の人々は此鏡を用ゐる事を好まない。それはさてをき、二人の者が起上つた時、父の目は潤ひ、太郎の目も乾ては居なかつた。

更に父はいふた、『太郎よ、罪があれば苦しみがあるといふは世の定規だ。此二は離すことは出來ぬ。だから苦しみがあれば必ず誰か、何處かで罪を犯したのだ。又罪があれば誰か、何處かで苦しまなければなるまい、特にお前に最も親しい關係を持つて居るものが苦しまなければならない。』

尚父がいふた、『さて太郎よ、お前は惡い事をした『そこでかうしようう、お前は三階の物置に御出で。其隅に小さな寢床をこしらへてやらう、三度の食事も持つて行つてやらう。それだから、三日三晩の間、丁度御前が人を欺いて居つた日數だけそこに御出でなさい。』子供は一言も云はなかつた。兩人は三階の梯を登り、父は子供に接吻を與へて去つてしまつた。

夕飯の時となり父と母とは食卓に就いたが、子供の事が氣にかゝり食も碌々出來なかつた。口中の食物は嚙めば嚙むほど益々大きくなり、乾燥無味、とても喉を通らない。母が『なぜあなたは召し食りませんか』と言へば父は徐に『なぜお前は食べないのか』と云ふ。すると母は喉につまつていふた、『私は太郎の事を思ふていたゞかれません。』父もいふた、『俺もそれで困つて居る。』

それから彼等は食卓を離れ、茶の間に往き、父は夕刊新聞を取り、母は縫物を始めた。父は視力がよくないので、眼鏡を用ゐて居つたが、今夜は特に曇つて居て文字が明かに見えなかつた。眼鏡のせいであるかと思つて丁寧に之を拭いて見ると新聞紙は倒になつて居つた。母は縫ひ物をしようと思つたが糸が切れ、どうしても糸は二度と針に通らなかつた。

そうかうする中に、いつも彼等が寢る十時が鳴つたが、動く樣子もない。母が柔しくいふた『あなたは御寢みになりませんか。』それから父はいふた『眠くないから俺はもうしばらく起て居よう、先きに御寢み。』『いえ、私ももう少しお待ち申ましよう。』そうかうする内十一時も鳴り、十二時も近づいて來た。そこで兩人は起つて寢室に入つたが眠れない。銘々眠つたやうに見せて居つたが、互に他の一方が眠つてを

らぬを知つて居つた。

暫くたつてから、妻はいふた―婦人はいつも過敏である―『なせお寢みになりませんか。』夫は又静かにいふた『俺が眠つて居ないのがどうしてお前にわかるか、なせお前は眠らないか。』そうすると妻は前と同じやうに聲を變に曇らせて、『太郎の事が氣にかゝり眠られません』。と云へば夫も『俺もそれで困つて居る。』と答へた。それから一時が鳴り二時が鳴つても眠られない、つひに父はいふた『もう俺はたまらない、太郎の處に往かう。』

父は枕を持つて、静かに室を出で、三階の梯段を静かに登り、子供を起さぬやう静かに戸を開け、つまだてになつて向ふの隅の窓側に進んだ。子供は目を大きく開き、之に露をうかべ、其頰に滴の痕跡を示して居つた。父は寢床の中にもぐり込み互に首を抱合ひ、涙は兩者の頰に流れ

渡り、其何れが父のもの、息子のものとも定め難かつた。かくて兩人は夜明まで共に眠に就いた。

翌晩寢につく頃になつて父はいふた、『おやすみ、母さん俺は又太郎の處に往かふ』。かく二晩目も父は三階で子供の罰を共に受けた。三晩目も寢につく時が來た頃父は又いふた、『母さんお寢み、俺は子供の處に往かふ』。かく三晩目も父は子供と共に其罰を受けた。

其子供は今立派な筋骨たくましき大人となり、予が知人の話によれば、支那の中部に於て焔の舌と焔の生涯とを以て耶蘇の物語を話して居るといふ事である。

此話は自分が人生と云ふ美術館に於て、之迄目擊したものゝ中で神に關する最もよい描寫であると思ふ。之は完全な描寫ではない。人が神に關して畫いたもので完全なものはない。勿論耶蘇の畫き給ひ

しものは例外である。此子供の罰は、神が吾等の罪に對して與へ給ふものとはちがつて、彼の父が任意に定めたものであつた。けれども自分が是迄見聞した中で最も懷かしき、又最も實生活に近いものである。

神は罪を取り去り給ふ事が出來なかつた。罪は此處にある。たしかに茲にある。神は吾等に對して親切なるが故に、苦しみを取り去り給ふ事が出來なかつた。何故かといふに苦しみは危險を示す所の罪の指針である。苦しみは『氣を付けよ、何か間違ひがある』と聲高く叫ぶ罪の聲である。かく神はその子耶蘇の身に在りて此世に下り、三日三晩の間、罪が人を陷入れた場所に於て、人の側に横はり給ふた。

神は斯の如き方である。此話は神の熱情を手に取る樣に示して居る。神は人の罪を忘れ給はぬ。三階に於ける子供は到底抹殺し去る事の出來ない二つの事を彼の記憶に刻んだ。即ち自分の罪の惡き事と、

自分の父の愛の力との二つである。

耶蘇は吾等の間に下り給ふた神であつて、又其生命を與へ給ひし神であるのみならず、尙吾等をして罪を憎ましめ且つ全世界を導きて罪を棄てゝ懷かしき家族團欒の和樂に再び立歸らしめんが爲に死して其生命をも與へ給ひし神である。

求愛の使

耶蘇は人の爲に父なる神の御顏を寫し給へる鏡であつた。かくて父は如何なる方なるかを知る事が出來るのであつた。諸君が耶蘇を視、又彼に耳を傾くれば是に由て父の心を視、又其溫かなる鼓動を聽くことが出來るのである。誰か之を見て其燃ゆるが如き熱情に捕へられず、其强烈にして而も徐に燃えて居る光輝を感せず、將又爾來其溫熱

と光輝との幾部分を享有するに至らざるものがあらうぞ。

耶蘇は求愛の使ひとして地上に來給ふたのである。彼が人に對し給ふ眞情は徹頭徹尾人々を父なる神に招かんとする戀人のそれであつた。彼は父は如何なるものであるかを人々に知らしめんが爲に熱中せられ甚だしく傷けられた神の名譽を恢復せんが爲に努め給ふた。人々は父なる神を誤解して居つたから、耶蘇は人々をして神は善良なるもの、愛すべきものなる事を知らしめんが爲に全力を盡し給ふた。これと云ふも、斯くせば人々が速かに父の下に歸り來るからであつた。此方法を採りて耶蘇は此世に接し人々を導かんとし給ふたのである。

耶蘇は古來知られたる世界最大の求愛者である、又恐くは此後も能く其目的を達し給ふ最大のものであらう。福音書を精讀し、又彼が凡

衆と接し給へる、單純にして而も意義深遠なる樣々の出來事に臨んで親しく耶蘇の側に立ち、其至つて通俗的にして、至つて痛切なる彼の教にもう一度新に耳を傾けられよ。さすれば如何なる場合に於ても片時も忘れ給はなかつた一の思想は人々を父なる神の伴侶たらしめんが爲に立歸らしめんとし給ふたのであつたといふ印象は、どうしても取り去る事は出來ない。

世を思ふ耶蘇情

諸君は耶蘇の思想と計畫との如何にも廣々とした世界的傾向に注意されたことがあるか。其新機軸の素晴しき、其精神の大膽不敵なる、其思想の絶大なる他に比類はない。今日の常套語を用ゐて云はゞ彼は世界意識を有たれたのである。彼が此世界意識は如何に驚嘆すべ

きものであつたかを悟るは甚だ困難である。吾等は福音書に慣れてしまつて、其内にある力を感ずることがなくなつた。されば新しき書物に對するやうな新しき考を以て之を讀まうとすれば、決心の臍をかため、聖靈の新しき感化を蒙むらなければならぬ。のみならず吾等は當今、特に吾等此國に住居する者は、世界的の事業を談ずるを日常茶話の事として居る。

けれども耶蘇の時代に於ては世界意識が如何に素晴しいものであつたかは豫想外である。耶蘇が之を得られたのは其時代からでもなく、又猶太人からでもなかつた。それらは彼の思想と全然反對であつた。猶太人は至つて狹き世界に住んで居つて、自分達のみが神の選民であると考へ他の人々は皆犬、即ち咀はれたる犬と思ふて居つた。それも敢て人を辱むる爲にいふのではない、實際そう信じて居つたので、

ある。

然るに耶蘇は全世界の事を考へ、全世界を慕ひ給ふた。『世』とか『地』とかいふ言葉は耶蘇が常に口にし給ふ事であつた。されば彼は『世に來れり』と言れた。其意味はパレステナに來れりといふ意味ではない。パレステナは基督の入り給ふ入口に過ぎなかつた。約翰が耶蘇をさして『凡ての人を照す眞の光は世に來れり』と書いたのは耶蘇より學んだのである。

猶太國民の間に知られたる宰に語り給へる、あの聖書全體の眞髓となつて居る大文字―約翰三ノ十六―に於て耶蘇は其目的とするものは世である事を明にせられて居る。耶蘇が地上に降り給へる使命の唯一の目的は世を救はんが爲である。彼は『世を救』はんが爲に來たのであつて、『世の命の爲に』己が身を與へざれば止み給はなかつ

たのである。

彼は內輪の人々に『畑』はこの世界であると言はれた。而して人人は彼が用ゐ給ふた方法を採つて世を導かなければならないのであつた。其方法とは人々即ち『天國の諸子』を種子として廣き世界に播くのであつた。（馬太十三ノ三十八）。

諸君は其前週にギリシヤ人が耶蘇に見えん事を願ふたのを記憶せらるゝであらう（約十二ノ二十―三十三）。今や猶太人以外のものが此ギリシヤ人の如き熱心と求道の念とを以て來りて敎を彼に請ふに至つたのであるから、耶蘇は全身に大震動の襲來るを感じ給はざるを得なかつたのである。これ長らく働き給ひたるも殆んど何等の成功をも見給はなかつたのに、長い間熱心に期待して居られた効果の微なる光を始めて見給ふたからである。是實に彼が全心を凝して考へて

居られた事の一微光であり、又一觸感であつた。今や廣き世界は彼の下に來始めたのである。

耶蘇は全世界が來りて其脚下に平伏すべき日の確實に到來すべきことと、其重大なる意義とを思ひ激烈なる感情にうたれ戰慄を催すを禁じ給はなかつた。己が生涯の理想即ち己が地上の使命を果す事が出來るといふ喜びと、此世界を導きて己がものとするには十字架の赤き道を辿らなければならぬと思惟せられたる絶大なる確信とは彼の胸中に非常なる衝突を生じた。つまり彼を擾亂せしむるに至つたものは世界に對する責任の自覺であつた。

彼をして動かざらしめたものは一に此世界に對する責任の自覺であつた。彼は散漫に流るゝを避け、一切を一の行爲に集中して、世界を震動せしめ、更に之を新たに形成せんが爲にカルバリー山頭に於て偉

大なる力を發揮し且つ之を活動せしめようとしたのである。あるとあらゆる人々は十字架といふ磁力によりて必ず引付らるゝものと信ぜられたが、此認識は彼をして其歩調を確實ならしめたのである。

二三日後のことであつたが、耶蘇がカンラン山の側に暫く休息して居られた時、弟子達が基督の經綸に關する御考へを尋ねた。其時耶蘇は福音を『普く天下に述べ傳』ふべき事を述られた（馬太廿四ノ十四）。此御考は寸時も彼の念頭を離れなかつた。どうして離れられようぞ。

彼の生涯の大目的と大心情とはあの最後の大命令の内に最も著しくあらはれて居る。『爾曹往きて萬國の民……弟子とし』、『凡ての人に福音を宣べ傳へよ』などの人心を奮激せしむる言葉の内に耶蘇の心情の全體が見えて居る。耶蘇の心情は此世界を導きて己のものとすることであつた。此情は時を經るに從つて益々強烈なるものとなつ

た。今日彼所に高められ給へる人なる耶蘇の唯一の熱情は、從來よりも一層強くなりて、此世界を己がものとなさんとし給ふのである。彼に取り其他の一切のものは皆之が爲に傾注せられ居つて、此外に彼の心情を滿足せしむるものはないのである。

偖て神に觸れた人はいつも神と同一の目的並びに心情によりて動かさるゝのである。神と直接に接した人、即ち神に觸れた人の心情は全世界を神のものとすることである。萬事は皆此目的を達する爲の道具立とせられ、之に適合せしめ、之に歸趣せしめ、又之と合一せしめられるのである。

主の計畫

世界を導くことが出來ようか
思想の變調
屬發の大祝福
世界は實際喪はれて居る
神の救の方法
世界を導く順序
其第一歩
奉仕は協同せしむ
世界を導くは山を登るが如し

計畫

此世を導く事が出來ようか

神の胸中にある大心情は愛情である。愛は衰へない。愛は待つ者であつて、必要ならば、永い間待つものである。しかも待てるものを得損なう事はない。愛は犧牲をする、けれども愛は勿論犧牲といふ言葉を使はない、なぜと云ふに犧牲であるとは思はないで、只其目的を達せんが爲に一心に努めるからである。鋭い切らるゝ痛みがあるかも知れないが、内に心情が焔えて居る爲に全く忘れらるゝ。神は此愛を以て此世の人類を導きて己の下に立かへらしめんとし給ふのである。

世界を導く事に就いて是迄述べて來た事に反對の意を表する信仰の友もあらう。諸君は此聖書の初の方に書いてある神の愛情に關す

る描寫を見て新しく感せられたに相違ない、けれども今迄話をして居る間始終諸君の心の裏面にもう一つの思想が蟠つて居つたらしい。それは『之は過言ではなからうか、全世界を導く事が出來ようか』といふ思想である。

此事に就て少しく述べよう。吾等は魂を導くと云ふ事を始終聞いて居る。又多少之を導かなければならぬと說勸められ强いられて居る。或時基督敎々役者の會合に於て、『一人を導く』と云ふ格言が大に持囃されたことがあつた。されば全世界を導くなどゝいふ、こんな考を述べ傳へられた事はない。先づそれは正統派の說のやうに見えない。古は全世界が喪はれてゐる、吾等は人々をそれより救ひ出さねばならぬといふ說敎を聞いたものだが、今は或地方以外にては之を聞くことは出來なくなつた。吾等は此世は邪惡にして、全く邪惡に陷り、敎

の望なきほど邪惡なるもの、又咀はれたるものであると聞せられた。若い頃ムーデー氏は此世は咀はれた世界であるから吾等の務は人々を救ふて之より逃れ出でしめなければならぬと非常なる熱心を以て說敎したものである。併し近頃はその反動が見えてゐる。全體人間のする事はなんでも時計の振子の運動に從つて居るやうに見ゆる、即ち始め一方に動かば次ぎには他方に動くのである。斯く吾等は當今大に趣の異つた說敎を聞くのである。其いふ所によれば此世は實によい世界である。なるほど惡い所もある、大にある。けれども全體から云はゞ此世は惡い世界ではないと。

古い時代の說敎は重に天國の準備に關するものであつた。今日のは概して淸潔で正直な生活を今此所で送る事に關するものである。此變遷は確かによい。而も此世は吾等が思ふて居るほど惡いもので

はないと云はるゝが普通である。

思想の變調

此變遷と共に罪、即ち此世を邪惡ならしめた當の責任者に關する思想も著しく變更つて來た。罪は今一見さほど恐るべきものではなくなつた。罪は概して生來の弱點、又は出生前の偏向、又は個人性の特質であるといはれる。（こんな難解な言葉は却て都合がよい、なぜかといふにいつでもこんな話が學者らしく尤もらしく聞えるから）。天國は概して看過せられ―地獄などは尚更眼中にない。國立教會々員等は物質的繁榮の潤澤と美食と壯麗なる家屋と教會堂との中に生活し、現在此世に於ける事物に滿足して少しも動く氣色はない。

こんな風であるから、之等の人々の口より屢聞く吾等の基督教を異

教國に興ふるの必要は少しもない。異教國の人々はそれ〴〵中々よい宗教を持つて居る、少くとも其等の宗教は其人々に滿足を與へて居るに、なぜ吾等は之を妨ぐるか、其人々は大そうよくやつて居るではないかと。されば喪はれたるものとか、救主が必要であるとかいふ話をすれば、それは時代後れと考へられ、從來普通にいはれた日々何千の人が死んで居るとか、永遠限りなく喪はれるとかいふ事は人氣を失ひ、そんな事は慘澹すぎると思はれ今日は昔ほど使はれなくなつた。

此反動は教會員の多數の上に、又外國傳道事業に關する彼等の思想全體の上に大いなる感化を及ぼした。教會の内に於ても外に於ても、判然言には表はされて居ないが、尚明白に感ぜられて居ることは宣教師を遣はすは實際喪はれたる人々を救はんが爲ではないといふ考である。そんな事を云ふのは今は殆んど俗であると云はるゝ。

傳道事業は實際御人よしの隣づきあひの一種であると思はれて居る、即ち信仰の有無に拘はらず、教會員たると否とに係はらず、何人でも多少皆之を助ける事が出來る慈善的人道主義のことであると考へられて居る。其人々の考によれば異教徒等に吾等が有する高等な生活の道を示さなければならぬ、吾等は家制や、學校や、教育や、醫學や、農業や其他之に屬する一切の事柄に關して、勝つたる進歩をなして居る、故に吾等は海外にある之等の憐むべき劣等民族を助ける必要があると。

又吾等は本來高等な民族であつて、高等な文明の程度に達して居る、而して吾等は餘裕を有するが故に遠い開けない處に居る隣人を少し助けてもよい。實に之は爲すべきの事であると考へて居る。

以上は外國傳道に關する當今の思想の一般の傾向であるやうに見

える。教會も、又其會員一人々々も富み榮えて吾等がもと貧しくあつた事を忘れてしまつて居る。食卓には山海の珍味を滿載し、之より落つる餘屑を以て慈善をなすを喜びとして居るのである。

屬邊の大祝福

偖て疑ひもなく宣教師の派遣は外國傳道地に於ける人間の生活狀態を大に改善するの助となつた。宣教師は進歩の前驅者にして、又其通路の開拓者であつた。西洋の新しい文明も、商賣も、外交も皆此道を經て入つたのである。從來世界の西半球に於て文明は著しき進歩を呈したのであつたが、宣教師は其先鋒となつて停滯せる東洋と野蠻なる南半球とに進んだのである。

自然界の本源並びに法則に關する豐富にして正確なる知識と、其知

識を利用して實際に應用することゝは、過去百年間に於ける西洋の最も著しき事柄であつた。其結果として教育も醫術も、衛生の學も、土壤の改良も、地上並びに地下に於ける物質的資源の利用も長足の進歩を見た。知識の範圍に於て、以上の事柄に就ける吾人の進歩は過去に於ける人類歴史上一切の偉業にも勝つて居る。

以上の事柄の或ものは破竹の勢を以て異敎國に入つた。けれども まだ深く徹底して居ない。今迄は單に上層と末端とに及んだばかりである。此方面に於ける進歩は速くして又遲い樣に見える。之等の民族の大多數は未だ西洋諸國の新鮮にして善良なる文明の空氣の一呼吸をも吸はないといふ事を考へれば進歩は至つて遲いやうに見える。さりながら異敎國の不思議な程沈滯せる精神と、計算することの出來ぬ程強大なる習慣の力とを記憶すれば其が至つて速く見える。

異敎の國々を掃除し窓を開いて新鮮なる空氣を入れ、石鹸と水を用ゐて其汚れを洗ひ去らんとするは宛も入浴を嫌ふ子供を洗ふやうなもので、中々困難な仕事である。さりながら其端緒は既に開かれた。子供は自分の顏の汚れたるを發見し、又之を感じ初めた。之は確かに一段の進歩である。

世界は實際裏は水て居る

以上の事は敢て咎むべき事ではない、けれども之は吾等が外國傳道の目的として居る所とは異り。此事丈でも莫大な金を費した丈の効果は見えて居るが、之等は皆屬發的の事であると、言葉に力を入れ極判然云はなければならぬ。勿論之は好都合な事であつて又當然の事である。耶蘇の福音の宣べ傳へられた所には、いつも必ず、此事のあるは

顯著な事實である。さりながら外國傳道の眼目は之ではない。其一大主眼とする所は人々に救主を提供する事である、斯て異邦の人々を導きて眞の神に立歸らしめんが爲熱心と愛とを以て神を知らしむる事である。

世界は喪はれて居るといふ事は明瞭日を見るが如きである。世界は父の家より遠くさまよひ、其方角を失つて居るから、助がなければかへる事が出來ぬ。されば此世は喪はれたるものであるといふ昔の說教は眞實である。

さりながら吾等は『世界』といふ言葉の異つた使ひ方を記憶せなければならない、昔の考へによれば此言葉は此世に於て人々を動す所のものといふ漠とした意味に使はれた。人生を破滅する所の私慾、邪惡並びに邪惡なる企圖などは普通聖書のうちに此世の心と云れて

居る。此意味に於て世界は惡い、徹頭徹尾惡い。人々は、ムーデーが云ふた通り、之より救ひ出されなければならぬ。さりながら此言葉の更に一般に使はれて居る他の意味によれば『世界』といふ語は單に全人類をさして居る。吾等は此世界は喪はれたる世界であるといふ明かな眞理を充分に認めなければならぬ。更に言葉を換へていはゞ人々は神より離れて居る。彼等は全く神を誤解し、剩へ神を誣ひ、神を罵つて居る。されば其結果神に對して全然信頼を缺いて居る。彼等は其錨纜を切り、磁石をも持ないで太洋に漂ふて居る。濃霧深くして太陽や星は勿論其他何等の目標をも見るを得ず、希望もなく助けもなく、空しくさまよふて居る。誰か磁石を持ち來りて、岸邊に歸らしめ、神に立ち歸らしむる助を與へんことを願つて居る。

されば此世の人々を導かなければならぬ。耶蘇は世界を救はんが

爲に來たといはれた。彼は此事を成就して、救はれたる世界を造り給ふまでは滿足し給はないのである。彼は世の生命の爲に己が生命を與へんといはれた。斯くて世界は其胸中に耶蘇の豐なる生命の鼓動するを認むるに至るであらう。

是は萬民が盡く救はるゝであらうといふ意味ではない。ある人々は神の道よりも却て自分等の道を執ると聖書に判然書いてある。予は聖書が敎へるものゝ外は知らぬ。今日に至る迄予が賴みとしたる知識の源は皆聖書にある事のみであつた。聖書は標準である、吾等は之を標準としなければならぬ。

頑固にして、神の柔和なる一切の哀求に反抗する人々もあらう。ヨハネがパトモス島に見たる極めて壯觀なる幻像にも火の池と、自分勝手な道に歩まんと主張した一團の人々とがあつたではないか。人は

神を捨てゝも尙神の像を喪はないで居る。人は自から擇れる地獄に於ても自分の意志の主權者たる地位を失はないで居る。

神の救の方法

救の方法は導く事である。父なる神はこの外の事では滿足し給はぬ。厩の燒るに當り毛布を以て馬の頭を覆ひ、騙したり、引張たり、すなはち危險を隱して救出すような方法は神の採り給ふ所ではない、神は決して罪も罪の結果も、亦罪の結果の邪惡なること、確實なることをも庇ひ給はぬ。

神は吾等をして罪の眞に惡むべきもの、如何にも憎々しきものなることを覺らしむると同時に、神の眞に聖く正しくして愛に富み給ふ事を知らしめ、是に由て罪を捨てゝ神を取らしめ給ふのである。現今行

はるゝ幾多の慈善事業即ち團體の組織によりて、何分個人的關係を結ぶことを避け、親しく手を觸るゝことをせぬ、所謂遠くからの慈善は、神のなし給ふ所ではない。神は其温かなる心を以て直接に凡ての人に觸り、密室内に於て其人々に說き勸め給ふのである。

人の最高の能力は選擇の力である、人が最も神に似て居るのは此點にある。神の計畫し給ふことは吾等の目を妨ぐる雲霧を拂ひ、蜘蛛の巢を取り、神の聖顏を拜するを得せしめ、進んで神に來るの心を起さしめ、走つて神に立ちかへらしめん事である。世界は自からの選擇により、且つ人に導かるゝことによりて救はるゝのである。人々は罪を捨て神の遣はし給へる救主耶蘇基督を取らんと心を定めるのである。之は大なる方法である。之は神が用ゐ給ふ唯一の方法である。神の胸中に燃る愛情は吾等が一切のものを捨てゝも神を取り、神と共な

る生命を唯一の生命として取らんが爲に吾等を創造し給ふたのであつた。

而して導きの方法は一人々々其同意を得る事に因りてゞある。一人々々の魂を導くと云ふ古の叫び聲は眞の叫びである。吾等は須く之を學んで働の方法とすべきである。一人々々は其人の自由意思より出でゝ喜んで同意を表する時に導かるゝのである。小賣があつて始めて卸賣がある。商賣上小賣は卸賣に先つものである、即ち卸賣は小賣の小供又其奴である。

此方法はつまり一人々々を先にする、さすれば其結果として計算も出來ぬ程の勢を以て大多數が出來るのである。人を導くは其方法、世界を導くは其目的、又其最後の結果である。

世界を導く順序

神の此聖書に、世界を導く順序が再三記されてある。其順序はいつも明かに了解されたわけではない。從來概ね誤解せられたが、今日も尙多くの人々に誤解されて居る。其結果多くの敎會員は方角を失ひ、主の御經綸より遠く離れ、己が生活と己が利慾の爲にさまよふて居る。されば今其順序を心のうちに明かにするは混雜を防ぎ針路を誤ることなく、眞直に舵を取る助となろう。

此順序の第一の事は廣く世界を敎化するといふ事である。之は目下敎會並びに基督者銘々に任せられたる大なる務であつて又特權である。其他の務は皆次位に屬するものである。之は廣き世界が悔改めるといふ意味ではない。それは後からの事である。其意味は耶蘇の福音の物語を萬國萬民に充分に又人の心に觸るゝ樣に話すといふ

事である。

其意味は、苟も助けとなる相當の方法であるならば悉く之を採用すると云ふのである、例へば病院の事、學校の事、出版事業の事、かりそめにも人を實際に助ける事であるならば、どんな事でも皆其內に含まれて居る。

就中、温かなる同情に滿ち、兄弟として親しく世話をするといふ意味である。單に說敎をする事ではない、勿論之は大切な事であるが、そればかりではなく尙あらゆる方法を盡して福音を實際的に宣べ傳へる事である。

此事が成就された時に神の王國は來るのである。王が來り給ひ又王と共に王國が來るのである。此に於て地上に於ける一切の道德的狀態に根本的變化が生ずる。今や福音敎化の勢は頓に增加し、回心者

は無數を算するに至るであらう。宛も一切の人々が王なる耶蘇に喜んで歸順する樣に見えるであらう。如此てこそ此世界は實に導かれたる世界と見えるであらう。

さりながら多數の人々の內には此大運動に釣込れ、單に外形上雷同附隨する者もあらう、之はいつも免れぬ事である。然るに吾等の王なる耶蘇が求め給ふことは全心を込めたる愛と奉仕とである。

偖て此王國時代の終りに當り、更に一大危機が起る。即ちヨハネが默示錄にサタンの釋放並びに其活動の復興と云ふて居るのがそれである。此幻像は少なからず予を苦しめた事がある。予は此極惡非道の者が固く縛られたる後に何故再び釋放されるのであらうかを怪しまざるを得なかつた。さりながら今予は其理由は次の如くであると考へて滿足して居る。即ち王國時代の終りに當り、心から耶蘇に忠義

を表さず、徒に多數の人々にならつて彼の前に跪いて居る人々は、向背何れを取るべきか之を決すべき機會を充分に與へらるゝのである。

耶蘇の求め給ふ所は心からの歸順である、唯之のみである。大切な事は人々銘々が自分から進んで己が欲する所を選擇する事である。之が品格を造るもの、又品格を現はすものである。如此最後の危機が來るであらう、此時に當り心から之を爲さんと欲するものは又耶蘇を捨てる自由を有して居る。サタンと惡の諸勢力との最後の全敗を以て此危機は終局を告ぐるのである。サタンは己が屬する所、即ち自ら選んで己の爲に擇りし所に往くのである。好んで神を捨る人々は自ら選ぶ所の道德的重力に因てサタンと共に其所に往くであらう。

其次にヨハネが默示錄の最後の二章に光目眩許りに畫いてあるあの神の處より出て天より降れる都城、即ち導かれたる世界の幻像が來

るのである。

其第一歩

此順序に關して記されてある重な句節は二つある。記憶せらるゝ通り、此世に於ける御生涯の最後の週に當り、耶蘇は弟子等にエルサレムの滅亡の事を話されたことがある。弟子等は未來の事件に關してもつと詳しく知りたいと思つて、此世の終りが何時來るであらうかと熱心に問ふた。之に對する耶蘇の答へは肝要な句節であつて他の幾多の事柄の中心點となつて居る―其答は神の國の福音は先づ萬民に證せんが爲に天下に宣べ傳へらるべく、然る後此時代の終りが來るであらうと云はれたのであつた（馬太廿四ノ十四）。

基督教會の第一の會議は世界的の福音宣傳の端緒に伴ひたる大成

功の結果として開かれたのであつた。それは外國、即ち異邦の悔改者の大多數を如何にすべきかといふ重大な問題を考究せんが爲にエルサレムに開かれたのであつた。

當時に至る迄の教會は實際上猶太人の教會であつた。此時に際しパウロは特筆すべき世界的傳道旅行を再三試みた。是に由て異邦人の大多數が基督を信じ基督教會を組織するに至つた。所がエルサレムにある猶太人より成る教會の或人々は思ふた、異邦人の信者は皆昔モーセが設けたる儀式を遵守しなければならないと。之に向つて教會の二大指導者なるパウロとペテロとが反對をした。

其時に司會をして居つたヤコブは、會議の終りに當り其宣言の内に、今吾等が談じて居る世界を導く順序に關して述べて居る（使徒十五ノ十三―十八）。彼はヨエルの豫言を引いて神の御經綸を遂行する三つ

の階段、若しくは時機があるといふて居る。

先づ第一は、萬民に耶蘇の福音を宣べ傳ふる事であつて、パウロは非常なる熱心を以て此事に當り、特筆すべき成功を見たので、此議論が初まつたのであつた。次は、萬民に福音を宣傳したる後に神の王國がイスラエル國民を中心として建設せられ、ダビデの幕屋が復び起さるゝのであつた。而してその目的は地上の異邦の人々、即ち萬民をして『主を尋ねさせん爲』であつた。

神の王國の目的は、大體に於て今日教會の目的とする所と同一である。即ち萬民を父なる神の家に立歸らしむる事業を更に手廣く進め、尙一層力を盡して之を勵む事である。

此外引照すべき句節は種々あるが、今は之で吾等の目的を達するに充分である。世界が導かるゝには相違ない。そして如何にして又い

つ導かるべきかは聖書に記されてある。

奉仕は協同せしむ

偖て此事に就ては凡ての牧師、教師等が意見を共にして居る譯ではない。主の再臨と王國の建設とに關しては、不幸にも教會内に永い、又時には苦々しい爭論があつた。予はそれに干與はる事を願はない、寧ろ之より免れん事を熱望して居る。今日人間社會に助けを與へなければならない切迫の事柄が澤山にあるから、爭論などに時と勢力とを費しては居られまい。

一言で云はゞかういふ事が出來よう。基督の再臨は今にもあるかも知れず、吾等の生きて居る間にか、又は一定の時期内にあらうと信ずる人々がある。彼の來臨は王國時代の開始となり、あらゆる人々は彼

に忠義を盡すに至るのであると。

又外の人々は福音の宣傳により、全世界が耶蘇に歸順するに及んで王國は建設され、それから耶蘇が再臨し給ふのであると信ずる。兎に角世人が耶蘇を救主、又王として普く承認するの時が來るといふ點に於ては兩者は全然一致して居る。

さりながら此處に一言して置たい事は、輓近教會内に第三の見解を有する人々があるといふ事、又それが實際三者中最大多數を占めて居ると云ふ事である。此人々は實際耶蘇の再臨に關せる教訓を無視して居る。其信ずる所によれば、耶蘇は已に來り給ふて居る、彼は社會に充滿する高尚なる理想、善良なる標準、並びに高貴なる精神のうちに絶えず來り給ふて居ると。

若しも現在の福音宣傳が予が是迄話した此順序を踏まないで、一足

飛びに全世界を導く効果を奏するとしても、尙其處に世界的福音教化に努力しなければならぬと云ふ有力なる論證が存して居る。何故かといふに望む所の結果を得るの道は外になからう。されば吾等が此の再臨問題に就いて信ずる所の如何に拘らず、奉仕に於て喜んで共に手を握る事が出來よう。予は人に此問題の何方の解釋を取るかを尋ねず、たゞ耶蘇の福音を到る所に擴めんが爲に其人と手を握つて働く事を常として居る。

主の再臨に關する見解の差異は熱心なる人々の實際的協同運動を妨ぐるには及ばぬ。吾等が全く一致して居る大切な事は、耶蘇の死して又甦り給へる物語をあらゆる人々に熱心に又愛を以て話すといふ事である。此事に於て吾等は心を盡して協力する事が出來る。

今日大切な事は耶蘇を充分に知らしめるといふ事である。之が當

今の計畫である。之は至つて簡單な計畫である。導かれたる人々は導くものとなるのである。何人も之でなければ出來るものではない。感謝に充されたる愛の熱情は其人の心の内に燃え其人の生活を奮激せしめなければならぬ。之が爲には簡單で而も周到なる組織が必要である。

此運動は猶米國の大統領選擧運動に於けるが如く周到に計畫せられなければならぬ。大統領選擧運動たるや、其目論並に其本領に於て、實に雄大なものである。數千萬方哩に散在する幾百萬人の一人々々の意見を速かに動かして、而も反對黨が盛に運動して居る眞中に於て、決戰的行爲に至らしめんとするのである。されば國内の廣大な全局面を區劃し、大體の方針を立て、詳細の手順を定めて取掛るのである。頭腦が明晰で力ある人々が全身を捧げて此事に當り、僅か二三ヶ月

の間に數千萬弗を費すのである。斯くて四ヶ年の後には復同じ事を熱心に繰返すのである。況んや主が吾等の手に任せ給へる大事業に向つては一層綿密なる組織と、進擊的の熱心と、智腦を搾りたる計畫とを以て當らなければならぬ。

而して吾等は如何なる選擧運動の總支配人が有するよりも更に大いなる指導力を持て居る―人の全身に火を放ち、愛情を以てあらゆる他の焔をやきつくし給ふ耶蘇を持つて居る。手落なく組織せられ、此大任務を果さんが爲會員銘々が燃ゆるが如き心情を有する敎會こそ吾等が切に要求するものである。

世界を導くは山に登るが如し

數年前の事であつたが一日或年老いた小學校長が敎場で、自分が昔

し歐羅巴に居つた時の經驗談をした。彼は瑞西觀光團の一員であつたが、團體はシャモネーに達し、其處で愈モンブラン登山の準備に取掛つた。知らるゝ通り之はアルプス山脈中の最高峯であつて、歐羅巴諸山中の覇王と呼ばれて居る。近年其時節になれば日々登山者の絶えることはないが、登山は甚だ困難な業である。

之に登らんとせば體力と、勇氣と、又特別な準備とが必要である。それでも至つて危險であるから、シャモネーの役所は登山者の爲に嚴重な取締規則を設けて居る。それによれば登山用具を最低極度に迄制限されて居る。勿論登山中は何事もせず只一心不亂に登る事ばかりに精力と精神とを傾注しなければならないのである。

偖て、此小な町で案内者を雇ひ入れて準備に取りかゝつた二組の團體があつた。時に一人の英國青年は案内者の言葉に耳を傾けず、自分

の目的を達する爲に絶對的に必要であると言張り種々なものを身につけた。

先づ此青年英國人は小いさな酒瓶や贅澤な食物などを携へ又途中の所々で景色や一行の寫眞を取らうと寫眞機械などをも持參した。更に又彼は途中で實驗したものを書き記し、後に之を出版して世の賞讃を博せん爲の準備として數冊の筆記帳をも携へた。粋な鳥打帽と華やかな毛布なども亦彼の携帶品の中にあつた。

年を取つた丈夫な案内者等はかねゞ〳〵種々の難儀や暴風雨などの困憊を實驗して居るから、熱心之に抗議を申立てた。さりながら。野心滿々たる青年は承知しない。せんかたなく案内者等は互に私語きつゝ青年の意の儘に任せていよ〳〵出發した。

第二の組の登山者等が出發したのは六時間の後であつた。此人々

が其晩泊つた小い石室に酒と美味な食物とが捨てゝあつた。之を見て案内者は笑ひ、其一人は奇異な目付で『あの英國人はモンブランに登るは冗談ぢやない事をさとつたと見える』といふた。それから少しく進んで筆記帳と寫眞機械とを發見した。更に登れば華かな毛布と派手な鳥打帽とが捨てゝあつた。遂に頂上に達して見れば青年は革襦袢のまゝ氣息奄々困憊の極に達して居つた。

此青年は暴風雨に遭遇し、命からく頂上に達したのである。併しそこに達したのを見れば眞更骨なしの青年でもなかつたらしい。さりながら絶對的に必要でないものを捨てなければならなかつたのである。『必要』といふ言葉の意味に關する彼の考は嶮岩と苦鬪した此時以來根本的に變化してしまつた。

そこで、此話をして居つた老教師は急に机にもたれ熱心に生徒に目

を注いでいふた、『若い時自分は丁度今の青年が登山の計畫をしたように自分の生涯を計畫した。當時頭の中に大きな文字で繪いたものは食物と、衣服と、又世界に知られんが爲に自分の經驗を詳細に書き殘す事とであつた。さりながら四十歳になつて我は身の暑寒を防ぐに足る着物丈を欲するやうになり、又五十歳になつて健康を保つ丈の食物を欲する樣になつた。それでも頂上に登る事は甚だ困難であつて、六十歳になつた時は若し頂上に達することが出來るならば己に對する世評などは何うでも可いと考へた。つまり頂上に達しさへすれば其記錄が世に殘らうと殘るまいと敢えて意とする所ではない。記錄は天に記されて動かないのである』。

吾等は此野心家なる英國青年を笑ふ。さりながら吾等の中大抵の人は丁度此青年のやうなものである。予が之を云ふも敢えて不親切

な意味で批評的にいふのではない、只親切心から、あから様にいふのである。されば靜かに聽かれんことを願ふ―吾等の多數は重荷を背負ふて頂上に達する事の甚だ困難なるを發見すれば忽ち頂上をば見捨てゝしまつて、平原に天幕を張り此處に住居を求めて小成に安んずるのである。故に平原を見渡せば天幕が澤山にある樣に見える。

瑞西の案内者の計畫は命掛登山の計畫である。吾等世界を導くものゝ學ぶべき計畫は正に之であつて、又之のみである。耶蘇の御計畫も亦之であつた。耶蘇は苟も妨げとなるものは悉く之を捨て給ふたのである、最後に世界に生命を與へんが爲に其生命をも捨て給ふたのである。吾等は彼に倣はなければならぬ。

焦眉の要求

三大部類
急務の磁針
世界一週飛行
東洋を經て西へ
基督教諸國
最大の要求
暗闇に手搜
耶蘇の活きた音信
不知の大缺乏

焦眉の要求

三大部類

人の心は柔和なものである、急務の叫びがあれば直ちに之に耳を傾ける。唯恨むらくは其聲が耳朶に徹し難いことである。基督教諸國の人心は私慾を以て滿されて居る。異教諸國の人心は普通の人道的感情を引き起すことすら適はぬ程私慾で固つて居る。

さりながらこんな人心でも、まさかの時に、一度覺醒するに於ては要求の叫に應じ決然として起つのである。例へば物質的の苦痛、即ち何か非常なる災難とか、饑饉などの叫びに對して人の心は直ちに之に應ずるものである。大地震が桑港を灰燼に歸した時に、米國全體が震ひ立ち非常な同情を催し、直ちに救助の輸送を開始した。心無しと思は

れた會社も、金錢に狂せりと云はれた守錢奴、即ち金と權力とを握らんが爲に他を壓潰して敢て省なかつた團體も個人も皆異口同音に起てありとあらゆる必要品の給與を迅速に且つ惜しげもなく送つた。

人々は親切な力ある言葉で同情を表はしたばかりでなく、尙數百萬圓の寄附をも送つた。さりながら之は一家族の事柄のように見えるかも知れない、實際之は自分の國民といふ家族の爲であつた。所が印度や其他の遠國に饑饉があつた場合にも吾等の心は同じようにそれに應じたのである。遠國の人々に莫大の金錢や物資を送り其饑を癒し、又其人々が畑に種子を播き新たに家業を興すの助を計かつたではないか。

物質的の苦痛よりも一層深い又大いなる要求がある。又最良の人心よりも更に一層柔和なる心がある。其要求とは神を知る事であつて、神を知るは物質的の方面より見ても亦心意的の方面から見ても共に豐富なる生命を得る所以、又之等の劣等なるものよりも更に高尙にして、更に清美なる靈の生活に入る所以である。又其柔和なる心とは神の温かき心に觸れたる人の心のことである。

此所に集まられたる基督信者の多數の方々は神に觸れ、其心に眞生命を受けられ、非常な幸福を蒙つて居らるゝ方々であらう。更に彌增さりたる祝福は前途に横はりて彼に觸るゝこと多からん人々を待つて居る。さて今吾等は神の世界的大家族が要求して居る二三のことに就いて考へて見たいと思ふ。此家族は神の家族であるからして又吾等の家族である。如此てこそ吾等は、神が是までも亦今も爲し給ふが如く、惜げなく迅速に又思慮を盡して之に應ずる事が出來よう。

諸君は予と共に世界一週の手短な旅行に就かれんことを願ふ。吾

等は急足ながらも此世界全體の明瞭な觀察をして見たいと思ふ。何故かといふに全世界は傳道地であるからである。宣教師は到る所に送られて居る、內國にも吾等の都市にも。

異教國ばかりが傳道地ではない吾等の都市も實にそうだ。差異はあるが、それは程度の問題に過ぎぬ。米國には基督教の標準があるが、他の外國傳道地にはそれがない、之が非常な差異を生ずる。併し此大いなる事實を除かばミッション事業はニューヨークに於ても上海に於ても等しく急務である。

若し吾等が全世界の爲に祈り、又其他の方法によりて之を導かんとせば先づ全世界に關する明瞭な觀念を多少得んことを務め、之をして宜しく吾等の思想と祈禱と計畫との助とならしむべきである。

先づ此世界は、宗教の立場から容易に三大部類に分たれて居るを記

憶するが可い。第一に非基督教、即ち異教の邦國並びに國民がある。此中にはマホメット教國も含まれて居る、なせかといふに此宗教は幾分か基督教の眞理に基いて居るが、其教訓並びに實行に於ては全然腐敗して居るから明かに異教の部類に入る。

第二に、基督教生活の活きた精神が形式と組織とに束縛されて殆んど用を爲さゞるに至つた羅馬、希臘教會即ち基督教の中世の歷史的二大形態の支配の下にある諸邦國諸國民がある。之等の教會に本質的の眞理は存して居る、さりながらそれは覆はれて隱れて居る。其內には眞正なる基督者の多數があるが、而も、曇天の日の湖碧に生活して居るやうなものだ。

第三の部類に屬するものは新教々會の支配の下にある邦國並びに民族である。

急務の磁針

之等の人々を今少しく觀察しよう、何處を出發點としようか、主が命じ給へる、又初代教會の實行せる、昔の規則はエルサレムから始め、進んで世界の極に達する事であつた。予は思ふ、神と人との爲に奉仕するに當りエルサレムから始めるといふ事は實際自分が今居る所から初め、それから最近のものに達し、更にだん〳〵遠いものに及ぼす事であると。

さりながら昔のエルサレムの規則は吾等英語をはなす民族に取り、又主が吾等の心と手とに委ね給へる此世界を觀察するに都合のよい地理上の規則であるから之に從ふことゝしよう。

磁針は北を指すが、進歩の磁針はメデヤ、ペルシヤ國が世界の覇權を握つた以來、いつも西を指した。然るに世界の急務を訴ふる磁針はい

つも東を指して居るは著しい事である。されば吾等はエルサレムから出發して東に向ひ、其要求を知らんが爲に世界一週旅行の途に上るは不可でなからう。

予は此話をなすに當り、統計表は用ゐないと前以て申述て置くから安心を願ふ。其代り廣い、又概括的な、而も判然とした印象を得たいと思ふ。統計表は大抵の人には邪魔であつて吾等普通の人間の多數に取り之は一種の魔者に過ぎぬ。勿論之は絶對的に必要なものであつて計るべからざる價値を有するものである。されば正確なる智識を得んとせば記憶を新たにする爲に之を用ゐた方がよい。

さりながら第一に大切な事柄は全世界に關する思慮ある思想を懷く事であつて、それから研究と、祈禱と奉仕との要求に應じて吾等が有する特殊の智識をだん〳〵に增して行く事である。全世界を一目に

見る事が出來るも亦非常な助である。

此目的を達する助として記憶すべき事は、地球の人口の三分の二は明かに異教國即ち、非基督教諸國であるといふ事である。之は素晴しい事實であつて、一言世界の急務を語つて居る。耶蘇が萬民に福音を宣べ傳へよと命令を下されてから、二千年の歳月を經たる今日に於ても、萬民の三分の二は未だ彼を知らず、其道德上の有樣に至つては彼が此世を去り給ひし時と變る所がない。

此三分の二といふ内に十億人が含まれて居るのである。併し此數は餘り多くして到底頭の中に收めつくすことは不可能である。大切な事は、それが如何に多大なりとはいへども之が爲め吾等の信仰と勇氣と祈とを不可能ならしめてはならぬといふ事である。吾等は古のヘブル人が彼等がとても爲し能はざる事をなさしめんとの神の御約

束を信ずるに躊躇しなかつた事を學びたいのである。併し十億といふ言葉を繰返すは基督に對する世界の急務を切實に又痛切に感せしむるに可いからである。

三分の一が普通に云はるゝ基督教國である。吾等が之をいふに當つては基督教といふ言葉を極く廣い割增をした意味でいふのである。

世界一週飛行

今日吾等がエルサレムより始むるとすれば、土耳古帝國内から始むる事になる。急ぐ旅の事なれば便宜の爲め亞剌比亞、波斯、亞富汗斯坦も此部に入れる。此地方はマホメット教即ち異教と基督教眞理との稍相混合腐敗したるものゝ本土であつて、此地より此教の勢力は世界に擴がつたのである。

此地方にある外國傳道事業は極く微力であるからして、福音に觸れたるものは實に寥々たるものであつて、無數の人は少しも福音を知つて居らぬ。救主の國と其東方の隣邦とに救主がない―救の必要は切實であるが救主に關する知識は皆無である。

其東隣に印度大國と、當然此部に入るべき小邦國とが位する。而しして確かに地球の人類の五分の一が此地方に集つて居る。實に之等の人々は大部分、吾等と血族上の兄弟である。太古彼等の祖先は吾等の兄弟の祖先であつた、されば此地方に於ける宣教事業は概して同族間の事柄と見做なければならぬ。英國が之を支配するやうになつてから、偉大なる人道的感化を之に及ぼした。此地方に於ける宣教的活動の勢は至つて凄まじく、其進歩大に見る可きものがある。

さりながら之は今日尚大に其必要を認められて居る働の準備に過ぎぬ。今日に至る迄忠實に種播に費した歳月は遂に收穫の最中に至らしめた。されど此地方の人々は一種奇異なる敬虔の情を有すれども、全然宗教道德の本質を失つて居るが故に、其内に行はるゝ不倫非道に充てる生活は人をして嘔吐を催さしむる。茲に聞ゆる要求の叫びは深くして又悲哀である。

更に東に進めば支那の大國が厖然とかまへて居る。おほまかに云はゞ世界の人々の殆んど三分の一が之に屬して居る。つまり支那の領分内にある人數と、あらゆる基督教國に於ける人數とが殆んど同數である。此處に非基督教的文明の最古最良のものが見出される。孔子の教は宗教ではない、道德的向上力と道德的生命とを缺いて居る格言や規則に過ぎない。

支那に就いて殊に感ずることは、異教諸國の殆んど凡てに於てもそ

うであるが、沈溺の精神である。萬事が死の有樣昏睡の狀態にある。凋萎病が全國に蔓延し一切の進歩を阻止して居る。風俗も習慣も制度も一見數千年前のものと異なる所はない。此點は基督教國に於ける發展の精神に對象して如何にも目立つて見える。

此事は奇異に感せらるゝ、何故かといふに發展の精神は吾等西洋の空氣であつて、子供の時から之を呼吸して來たからである。此國民の知性と勤勉の習慣とに至りては特筆すべきものがある。支那人は其潜勢力と、知性とに於ては東洋のアングロサクソン人種と呼んで可い。吾等は謙遜の念を以て、アングロサクソン人種、即ち英語を話す人種は現在の諸民族中最大のものであると思つて居る。世界の覇權は數百年來アングロサクソン人種の掌中に歸して居る。此指導の下に世界は前古未曾有の驚くべき進歩を見た。

偖て、支那人が覺醒するに當つては、此人種は新覇權を握るに至り、世界の歴史に新局面を開くかも知れぬ。其覇權は道德的に如何なる種類のものであつて、又其局面は如何なるものであるかは、之に對する吾等の祈りと、吾等の贈與と、吾等の宣教的奉仕との如何によつて定まるのである。

東洋を經て西へ

更に東に進めば新進氣鋭なる日本國に達する。此國は其地理的の位置の相似たるが故に東洋の大英國と呼ばるゝ。現在の日本は異教國通有の沈滯を破り一の除外例となつて居る。此民族は西洋文明の習得者として驚天動地の記錄を作つた。驚くべき能力と知性とにより、西洋の知識と精神とを吸收し、摸倣し、又己が必要に應じて之を適用

した。

日本は、殆んど並外れて利口で、野心を抱いて居る、而も利口で野心を抱いて居る丈、其行爲は狡猾にして其道德的生活は不潔である。彼等は東洋の佛人と呼ばれた、此評は多くの點に於て適中して居る。日本に於ける福音宣傳事業は著しき進歩を呈して居る、さりながら現在道德上の要求は、日本人の進取的精神の熾なるに準じて益々切實の度を高くして居るのである。

此國の東と南とに位する島々の人種は日本人とは丸で異がつた民族であるが、此等も亦島帝國なる日本の部に入いる。太平洋に散在して居る多數の島々は此部に屬する。宣敎師の働より基督敎文明の感化を蒙つた地方をのぞけば概していづれも野蠻の狀態にある。福音は此地方に於て驚くべき變化を來したが、尙働の餘地は澤山ある。『島

大陸』なるオースタラリヤは英國殖民地であつて勿論今は基督敎國の內に數へらるゝ。之と等しくニューゼーランド大島もやはり英國の殖民地であつて、近世文明の最も進歩せるある種の方面の指導者である。

大平洋を東に橫斷すれば南亞米利加、北大陸との連絡地帶なる中部亞米利加、又通例外國傳道地の內に數へらるゝ墨其西哥などに達する。南亞米利加は『等閑に付された大陸』とも云はれ、又『好機會の大陸』ともいはるゝ。墨其西哥より南亞米利加の南端『火の國』に至る廣大なる地方の宗敎上の有樣は如何といふに皆羅馬カトリック敎會の勢力範圍內にある。されば此地方の或部分は『バプテスマを受けた異敎國』といはれて居る。此地方の人々は實際に生命のない敎會組織と形式との束縛に全く捕へられて身動きもならぬ。されば耶蘇の

福音宣傳の急務なるは尙進歩したる支那に於けると、野蠻なる亞弗利加に於けるとに比して敢えて劣る所はない。

太西洋を横斷して、もう一飛遠く東すれば暗黑亞弗利加に達する、是で主要なる異敎諸國巡視の世界一週飛行が終りを告ぐる。亞弗利加は其東北端に於ては世界最古の文明を有し、其南端に於ては最新英國文明が急速の發展を爲して居るとは云へ、不思議にも野蠻國たるを免れぬ。それは住民の色に於ても、亦其悲しむべき窮乏と墮落とに於ても『暗黑なる大陸』である。世界人口の大凡十分の一は此處に在る。宣敎師の數は開けた印度に於けると同數であるが、國民的組織の缺乏と交通機關の不備との故に其働は充分に効果を擧ぐる事が出來ぬ。

亞弗利加は主として分離せる大小部落の群集せるものであつて、其

多數は野蠻極まる狀態にあり、救を必要とするのみならず文明の輸入をも急務として居る。其野蠻的狀態を救ふの急務は宣敎事業を促し、又之を惹付ける磁石となつた。故に今日まで宣敎上なされたる一切の事柄は其墮落と野蠻との深淵に殆んど併呑されたやうに見える。

予は諸君と共に異敎世界の有の儘の實際を一瞥せんが爲め急いで世界を一週した。若し吾等が地圖若くは地球儀と聖書とを手にし跪きて時々斯の如き飛行を試みなば更に親しく此世界に接觸を保つことが出來やう。主は此世界の爲めに死に、斯くて此世界を導かんとし給ふたのである。主は諸君と予とによりて之を導かんとし給ふのであるが、主は必ず之を成就し給ふのである。

基督敎諸國

予は是より吾等の基督教諸國に就いて少しく述べよう。此等の諸國とは、即ち歐羅巴と、亞米利加と、並に歐羅巴と亞細亞との兩大陸に跨り地球の兩側にぶらりと足を垂れて居る大きな露西亞とである。之等も矢張り傳道地である。之を外國傳道地と呼ばふか。それは一に諸君が何處を指して內國と呼ぶかに依つて定まるのである。兎に角之等は皆傳道地である、全世界は皆神に取りては傳道地である、外國傳道地であらうと、內國傳道地であらうと、其言葉は何れであつても實際に於ては差異はない。

普通に『基督教諸國』と云ふは如何なる意味であるか、之を記憶するは吾等の祈の助けともなり、又異教國に就いて思考するに當り吾等をして謙遜ならしむる助けともならう。勿論基督教諸國とは、其國に於て基督教の標準が道德並びに生活の適當なる標準として一般に認

めらるゝをいふのである。

其住民が悉く基督者であるといふ意味ではない。之に屬するものは少數であつて、大多數は屬して居らない。又基督者と呼ばれて居る少數の者も日常生活や實際上耶蘇の原則によつて支配されて居るといふ意味でもない。其人々が之によつて支配されて居らぬ事は大抵一般の承認する所である。基督教諸國の人々の個人的生活の內に私慾なき基督の精神が行はるゝよりも、寧ろ異教國の特徵たる利己心が更に多く跋扈して居るといふは過言でない。斯くいふは不親切で又批評的に失して居ると聞ゆるかも知れぬが、敢えて批評的の精神を以ていふのではない、只事實を有の儘に述べんとするに過ぎぬ。諸君が此事を熟考せらるれば其眞理たるを悟らるゝは予の疑を容れざる所である。

尙又『基督敎諸國』といふ言葉は、猶は異敎國が何處までも異敎國であつて、徹頭徹尾非基督敎國であると云ふが如く、之等の國々が徹頭徹尾基督敎的であるといふ意味でもない。實際上異敎國が異敎の精神によりて支配されて居るが如く、基督敎諸國は全然基督敎の精神によりて支配されては居らぬ。異敎國が異敎と呼ばるゝ資格を有する程、吾等は基督敎國と呼ばるゝ資格を持つて居らぬ。

其主なる意味は基督敎會が其根底を之等の國々に据えて居ることと基督敎的標準が之等の國々に於て普通に認められて居ること―勿論實行上之は通例無視されて居るが―とを指すのである。其意味はいつも福音の宣傳に伴ふて來る物質的並びに精神的生活に於ける偉大なる屬發的祝福を蒙つて居ると云ふこと、又其意味は基督の福音の人情を和げ、人心を高むる力が深く吾等の文明に浸透し吾等の生活

一切に影響を及ぼして居るといふ事である。之は眞實である。さりながら此大氣中に生存し其利福を樂んで居りながら多數の人々は其生活の荒筋に於ては全然利己的であつて所謂非基督的である。なにせ基督敎の理想が吾等の生活の大部分を支配して居るのであるから、『基督敎諸國』といふ語は實際吾等の實行を指すのではなくて、吾等の特權を指すのである。

最大の要求

歐羅巴と亞米利加との基督敎諸大國に就いて一言しよう。歐羅巴のカトリック敎會に屬する諸國は、新敎々會が目して傳道地とするのであつて、數年來傳道事業が經續されて居る。之と同樣に露西亞も通例極く困難な傳道地と考へられて居る。大英國の或地方、亞米利加の

西部諸州並びに新開地、南部の山勝ちなる諸州、又其他の地方の特殊團體の間に於ける宣教事業は歩調よく進んで居る。

多數の人民の集合地なる諸大都市も亦獨特なる傳道地である。今日の都市は世界の道徳上の實際の有様を再現して居る。都市は全世界の縮圖の如きものである。異教國の道徳上様々なる狀態、即ち無信仰、野蠻、野卑なる迷信、婦人の墮落、兒童の放任、自制力なき劣情等を基督教諸國の諸大都市に於て、即ちニューヨークとシカゴに於ても、ロンドンとパリに於ても、ウヰンナとベルリンに於ても其様々な程度に於て見出さるゝのである。大部分は隱れて居るが何れに於ても多少存在しないことはない。

生活の道徳的標準が一般に認められて居るのであるから、之等の狀態はひどく目立たないがいづこにもある。されば之等の都市に於て

傳道事業に熱中して居る人々は、日々到る所に目擊するものより更に大にして切なる急務はないと考へて居る。

吾等の基督教國都市に於ける細民窟は厖大なる異教國と其道徳上の有様に於て肩を並べて居る。要求の聲は到る所熱心に悲哀の音を發して吾等を呼んで居る。良傳道地は到る所に望み次第横つて居る。

就中、最大の要求、即ち『最大』といふ語のあらん限りの意義を盡したる急務は異教諸國である。それらの國々に於ける人數の多數なる事と純然たる無智の有様にある事と、又福音の智識と向上の力とを得る機會の少なきとは皆『最大』といふ語を強めるのである。普通生活の道徳的標準を缺くが爲め、罪の偉力は數百年來の強烈なる惰性によつて蓄積して居る、吾等が經驗する普通の誘惑は勿論の事、吾等基督教諸國に於ては全く知られてゐない兇暴、邪智などは皆『最大』と

いふ語を太い文字で墨黒々と書いて居るのである。

暗闇に手搜

以上は世界の要求を一握りにして示したのであるが、之からもう少し近づいて調べて見よう。吾等が今迄語つたのは人間の事である、即ち吾等の兄弟の事であつて、單に何百萬人といふ統計上の冷たい總數のことではない。全世界の切なる要求の哀れ果なき繪畫が此等の人人の一人々々の内に活如として寫つて居る。

諸〻の異敎は、深夜、自ら所有せざるもの、しかも深く缺乏を感ずるものを羨望して心から叫んで居る。此等の異敎の迷信と惡辣なる實行と信仰とを指して宗敎と呼ぶは不思議な事である。之等の宗敎を多少尊敬の意を以て談ずるやうになつたのは寧ろ近來の事である。世の

中の事物は不思議にも混同さるゝものである。之等の宗敎が譽はやされ。神は之等の諸宗敎に自らを啓示し給ふたと思はれ、之に依りて人は神に到達せんと欲し又之によりて彼に到達する事が出來ると思はれた。

之等の宗敎は凡ての人を照らした神の目眩き光が黄昏に及んで微光を放つが如きものであるが、誤謬と、迷信と、不自然な劣情とが交錯混雜して、人を導きて神に立ち歸らしむるなどは到底不可能である。之等一切の諸宗敎の内に何等かの眞理の核は入つて居る。さりながら其核は堅く殼の中に閉込められて如何なる力も之を破つて眞理の核に到達して之を實行に供する事は出來ぬ。

之等の宗敎は哀れにも、人の心が神を手搜り求めたる事を示めして居る。而も暗闇に蜘蛛の巣の張りつめたる處塵と汚物との間を手搜

りして居るのである。

予は異教國に於ても正しい心を持てる數知れぬ程多數の人々が在つて神を慕ひ求め朦朧げにも彼に觸れんとして居る事を疑ふものではない。神は彼等を去る事遠いものではない、さりながら彼等は之等の宗教によりて助けを受くるのではなく、寧ろ之等の宗教を有するにも拘はらず彼を見出すのである。

支那の洋服屋が光を得んと色々苦心して度々失敗し、遂に耶蘇を發見して其望みを達したといふ話がある。彼は其を次のやうに平易に述べて居る。

『ある人が深い暗い穴に陷り、泥の中に身動きもならず呻吟て居ると、折しも其側を通る人の足音がした。けれども其人は助ける氣色もなく、そしらぬ顔して通り過ぎた、之はマホメット教であつた。

『次に、通りかゝつた孔子は穴の緣に近づき「あはれな方、お氣の毒の事である、そんな所に入るは愚の至りではないか。一言の御忠告をしよう、若し出で給はゞ再び入り給ふな」と云へば、其人は「私は出られませんと答へた、之は儒教であつた。

『次に佛教の僧侶が來合せていふた「あはれなる方、御樣子心痛の至りである。御自分の力で三分の二の所までか、又は半ば程迄這ひ上り給へ、さすれば手が屆くによつて御引上げ申さん」。されども穴の中の人は到底自ら上る事が出來なかつた。それが佛教であつた。

『次に救主が通りかゝり、其叫びを聞き穴の泥際に進み、自らを低くし、哀れな人の手を取り、彼を引上げ、「往きて再び罪を犯す勿れ」といふた、之が基督教であつた。』

異教諸國一般に亙つて目擊さるゝ不道德の狀態は、之等の諸宗教の

感化をあり〳〵と示すものである。之等の宗教は人を助けて神と光とに導くものではなくして、却て惡魔と暗黑とに引き下げるものであるといふて差支はない。之等の宗教は道德的向上の力が全然缺て居るといふばかりではなく、寧ろ墮落せしむる恐るべき引力となつて居る。されば彼等がいふ宗教其ものは取りも直さず之等の人民の偉大なる要求を哀れにも指示して居るのである。

耶蘇の活きた音信

偖て之等の民族が要求する所のものであつて、又吾等が彼等に與ふる事の出來るものは何であるか。先づ彼等が要求して居らないものから申述べよう。遠慮なくいはゞ、彼等は吾等西洋の教會制度や又は吾等の頭腦より搾り出した種々な諸會合、諸團體などを異教の地に移

植することを要求しない。彼等が要求するものは吾等が持つて居る西洋の信仰個條や神學ではない。

勿論教會も諸會合もなければならぬ。之があつてこそ働が擧がり、それが維持されるのである。さりながら之等のものは、つまり一時的のものに過ぎぬ。極く大切な缺くべからざるものではあるが、第一のものではない。必要の大いなるものは**耶蘇の物語**である。言ひ換ふれば罪に關し—亞細亞に於けると亞米利加に於けるとに拘はらず之は最も困難なる事業—又罪の內に封ぜられたる恐るべき結果とに關する簡明なる教訓、愛の物語、基督に於て啓示されたる神の愛を人の心に入る樣に、忍耐を以て柔和に話すこと、又耶蘇が其人の心に新しき道德力を生ぜしめ、彼をして全く新たならしめ給ふやうに話すことである。

併し彼等の要求する所は之ばかりではない、否更に多いのである。彼等の要求する所は人々―彼等と同じ様な人々で、親しく彼等の中に生活する人々―であつて、人の唇を以て話す事の出來ない耶蘇の話を高潔にして力ある美はしき生涯を以て綴る人々である。

彼等と等しく甚しく誘はるゝも、其生活に於て誘惑を征服する力を明かに示して居る人々と交つて生活する事―之こそ彼等の大要求である。つまり良き種子は單に眞理の音信ではない、寧ろ『天國の諸子』、即ち耶蘇の音信を生活に現はす所の人々、否更に進んで日々に耶蘇の力を現はす所の人々である。

或る幼稚園の先生がシカゴの至つて貧しき人々の住居する方面の小供等の爲にミッション事業を始めた。此婦人は町に居る不潔にして不體裁子供等を清楚としたミッションの室内に集め、其端緒として、

お定りの説教とか祈りとか其他之に類する事の代りに、机上に美麗な大きな百合の花のいとも純白にして人の心を魅する許りのものを挿して置いた。

此花が一人の小さな女の子に與へたる感化は著しくあつた。小女がそれを見るや否や、己が汚き手と着物とを打ながめ、顔に紅を浮べつつ、急いで街に出て往つた。少許にして少女は歸つて來たが、而も顔を洗ひ、髪を梳づり、着物を着直し、美麗な一片のリボンさへも付けて居る。少女は眞直に百合の花の所にまで進み、其目に深き嘆賞の色を現はし美麗なる白き花を永い間みつめた。

花の純潔を鏡として少女は己が汚なきを見たのであつた。花は少女を靜かに、而も力强く己が品位の高きに引きつけた磁石であつた。それはこの少女をして此向上力に應せざるを得ざらしめた所の靈感

であつた。

純潔なる人間の生涯は道徳的磁力の最大なるものである。耶蘇こそ實にかゝる磁力であつた。耶蘇がなかつたならば斯の如き生涯は吾等に取りて不可能であつた。かゝる生涯こそ舌を以ては語ることの出來ぬ耶蘇の力を語るのである。それは聲高らかに人生の標準を示すと共に、更に又人生を此標準に從つて高め得る力の如何なるものなるかを語つて居る。それは單に吾等が何を爲すべきかを語るのではない。それであつたならば、徒らに氣を揉ませ人を揉ぶに過ぎまい。之に反してそれは吾等が實際如何になり得べきかを語るのである。

耶蘇は音信以上である。彼は人の生命内に於ける生ける力であつた。之こそ人心の大要求—耶蘇の清淨と耶蘇の力との音信が**生ける人々の中に體得され**、此世に於て人々の兄弟となり、人生の浮沈の間に

共に交り共に生活する事である。

不知の大缺乏

人々の要求の大いなることは、人々が其要求する所を知らぬといふ事實に著しく現はれて居る。彼等は夜に慣れて日光を求めなくなつてしまつた。彼等は餘り永い間饑ゑて居つたから饑の感じも食慾の刺激も全く失せてしまつたのである。

二人の有名なスカンデネヴヤ人即ちオール・ブルといふヴァイオリンの名手と、蒸氣船に螺旋推進機の使用を世に敎へた大發明家ジョン・エリクスソンとに就ける面白い簡單な話がある。一方はノルウェーの人であつて一方はスウェーデンの人であつた。若い時には友達であつたが、後共に漂浪生活に入るに及んで別れ、共に有名になるま

で再會の機會がなかつた。然るにオール・ブルが亞米利加旅行中舊交を温むる機會を得た。

ブルが愉快に談笑して別るゝに當り、其晩音樂會に出席すべき丁寧なる案内をした。さりながら至つて無趣味なエリクスソンは仕事が忙はしいから、又音樂に費すべき時がないからと云つて斷つた。

ブルは再三案内をして遂に云ふた、『若し君が來ないならば自分はヴァイオリンを携へて君の處に來て彈奏しよう』。有名な發明者が笑ひながら答へていふには『そんな事をするなら粉微塵に打ち碎してやる。』ヴァイオリンの名手は自分の樂器が人心に觸れ之を覺醒して新たならしむる驚くべき、殆んど超自然的の力を信じて居つたから、無趣味な物理學に熱中して居る此科學家に、樂器が如何なる感化を與ふるかを知らんとの好奇心に驅られ、外交政略を思ひ立つた。

一日彼はヴァイオリンを携へて其友を其工場に訪ねた。彼は絲と螺旋と護牀とをはづし、樂器の不備なる點に就いてエリクスソンの注意を喚起し、それに關聯して居る科學的音響學的の原理を尋ね、木質の異なるに從つて異なる結果を生ずる事を論じた。此事より更に音波のことに說き及ぼし、遂に自分のいふ所を例證せんが爲に彼は樂器を整へ、張りつめた絲に弓を靜かにあて、實に爽快美妙なる音を起した。

所が、工場の職人等は其道具を捨て、目を丸くして耳を傾けた。オール・ブルは巧に彈奏を續け、工場を變じて禮拜の場所となした。彈奏の終るやエリクスソンは垂れたる頭を擡げたが、其目は潤ふて居つた。而して靜かな聲に崇敬の情を浮べていふには『もつと〳〵彈き給へ。止め給ふな。もつと彈き給へ自分は是迄自分の生活に缺乏して居るものは何であつたかを知らなかつた』と。

之は何處に於ても人々が耶蘇を知つてから云ふことである。彼等は耶蘇を知らないものであるから、彼を知ることに反抗する。内にありては此種類や彼の種類の神學に對し、或は説教に對し、又は教會の集に對し、或は又何か面白からぬ記憶のうちに存する信者などに對して偏見を有するが故に門戸を塞ぎ、外にありては基督教國の仕打、又は何事か新しきものに對する偏見などの爲めピシヤリと戸を閉ぢドシンと門をさしてしまふのである。

されば之に入らんとせば大なる外交政略、愛の外交政略並に蛇と鴿と、即ち智と馴良との融和が必要である。而して戸を揑開け、耶蘇の御聲を聞き姿を見るを得せしむれば、彼等は心より『之は我要求する所である。此耶蘇こそ吾等が生涯に於ける缺乏である』と絶叫するのである。

目下の好機

何人かゞ戸を叩いて居る
暗闇に佇んで居る
其處に居るは何人ぞ
未來の大指導者
何を求むるか
訪問の答禮
「我に行ひしなり」

目下の好機

何人かゞ戸を叩いて居る

神の心中に温情がある。其火は燃えて絶える間もなく、衰へもしなければ燻りもしない。之は神の子なる人間に對する情であつて、強い引力を以て人を己に引いて居る。人は之に從ふを拒み得るも引かるゝを拒む事は可能ない。

人の心中に、神の招きに應ずる情がある。それは明かに説明されず又よく了解されずに居る無言の渇望に類するものである。人はそれとは思付かずに居るが、其心は言はず語らざるに神を慕ふて居る。元來神と人とは別れぬものであつて、罪が兩者の間に間垣を造つた前迄、兩者は一所に居つたのである。兩者相依るものであつて、一方は他方

に依らなければ完全でもなく、又幸ひでもないのである。

人が神に立ちかへらなければ神は必ず心に滿足し給はぬ。又神と相結ばなければ人は心に安きを得ない。此兩者はいつも互に引いて居る。神は其心中の大なる至情によりて人を引き、人は又いつも其心底に於ける無言の敬慕のうちに、神の温かにして而も力ある引力に應答へて居る。

やがて兩者を隔離するものは取り去られよう。罪は甲板より投げ出され、其憎々しき重量によりて海底に沈んでしまうであらう。そこで神と人との喜ばしき再緣は結ばれ、兩者の心は再び琴瑟相和するに至るであらう。それで今は人の心の中に存する神の心に應せんとする此情に就いて少しく述べよう。

異敎國は今日基督敎會の戸を叩いて居る。彼等は悟つた、敎會が神

に關する豐富にして眞實なる知識を有する事を。それで敎會の戸を熱心に強く叩いて居る。戸は微かに開かれたばかりであるのに、それを續け樣に叩いて居る。然るに內部に居る多數―最大多數？―は之を聞いて居るやうに見えない。

目下敎會の立場から見て最も著しい事は、異敎諸民族が主が吾等に命じて彼等に與へよといはれたるもの、それを求めて居る事である、基督敎會の引力並びに基督敎活動の中心は今日異敎諸國に向つて居る。

百年前、敎會が大いなる異敎諸國に再び入る事を開始した時、敎會は鶴嘴と斧と、鐵桿と鑿とを使ひ門戸を揑開けなければならなかつた。いはゞ夜盜の道具を使つたやうなものであつた。確に夜盜の暗燈を翳して暗夜に働いたのであつた。然るに異敎國の戸は廣く開かれ、今

や異教の戸を叩く者は吾等ではなく、異教國が却て吾等の戸を叩いて居るのである。

十億の同胞兄弟等は暗夜に吾等の戸を手搜り、吾等が有する光を求めて或は小膽に、或に熱心高らかに切りに叩いて居る。夜は寒く又永い、さりながら深更既に、來らんとする光の恩澤を思ふて心躍つて居る。彼等は戸を搜り當てゝ之を叩いて居る。非基督教世界全體は吾等の教會の戸に押寄せ來つて絶間なく、執拗、叫喚で居る。

暗闇に佇んで居る

予は世界の各國が實際福音に門戸を開いて居るとはいはぬ。何故かといふにまだ之を開いて居ない、比較的稀薄な人口を有する二三の國々もあるからである。但し之に入らんとして强て揑ぢ開けた人に

は其片隅だけが開かれて居る。

予は門戸を開放せる之等の國々に於ける人々は皆、耶蘇の言葉を送らんことを吾等に求めて居るといふのではない。其大多數は吾等の事も耶蘇の事をも聞いた事はない。尋ぬべき耶蘇のある事すらも知らずに居る。若し知つたならば諸他の民族と等しく彼等も求めるに定つて居る。

求めて居る之等の多數の人々も皆福音を求めて居るといふのではない。そうでない場合が澤山ある。彼等は心を强く動かすものが必ず要なものと思つて之を求める。されば西洋の學術を求め、又自然力を征服して之を利用するの秘密を吾等より學ばんとして居る。

疑もなく、多くの場合に於て、彼等は基督教を少しも欲して居らない。單にそれは彼等が要求する所のものに伴ふ避くべからざるものであ

ると思ふて居る。されば彼等の目的とするものを得んが爲に、しばらく之を忍ぶ積で居る。彼等の目は吾等が有する基督教文明の燦爛たる光に奪はるゝのみであつて、其文明の由來を了解しない。其最大多數はこんな事に考及ぶまでに目を醒して居らない。

吾等の有する光明を得んとして彼等が之を求むるは、恰も吾等が人に何か物品の發送でも頼むやうな風に考へて居る。彼等は其住所に電力供給の機械を据付て自から電燈の光を作らんとするまでに進んで居らない。吾等が有する一切の文明は世界の光なる耶蘇が吾等の間に在すが故であるといふ大事實に氣がつかぬ。

さりながら利己的の動機や、考へなしの了見や、誤解などが何程あつても、異教諸國が基督教國の戸を叩いて居るといふ不思議なる前古未曾有の大事實は其眞たるを失はぬ。されば確かに何處に於ても實際

のものを哀求して居るものが發見される。實に外國傳道地に於ける多數の者は基督教々師の送られん事、又それと共に神に立かへる道を教へる聖書や他の書籍の送られんことを願つて居る。彼等は神の知識を何處に求むべきかを發見し、之を求めて絶間なく叩いて居るのである。

支那に定住せる美以教會の監督バシュフォルド氏が自分の心を痛めた實驗談をした事がある。或時氏は深く内地に入り、一日野外にて、群集せる支那人に耶蘇の話をした。通譯が支那語に譯したのを人々は深き尊敬と強き興味とを以て聽いた。

説教が終つた時、監督は若し彼等が、前に福音を聞いた事があるかと尋ねた。一人もなかつた。彼は絶對的に新しき土地に鍬を入れたのである。所が、人々は彼の周圍に押寄せ來り教師派遣の事を熱心に願

つた。バシユフォルド監督の此經驗は外國傳道地到處に於て再三再四反覆さるゝのである。

其處に居るは何人ぞ

是以上の事がある。到る所之等の民族の間に、其心情を親しく探れば、心底に音聲にも言葉にも現はされぬ缺陷を滿さんとする渴望が發見さるゝ。且つ彼等は自ら渴望する所のものは何であるかを明かに知らぬ、只內心常に不滿と疲れとを懷いて居る。今日非基督敎世界は無言ながらも其心のうちに熱心に吾等より光を求めて居る、されば吾等の玄關を叩く音は益々高く益々强くなる。

水師提督ペルリが五十年前、聖書を開き、亞米利加の國旗を揭げ、船を東京灣に進め、東洋の玄關を叩くや、形勢はまるで一變した。爾來吾等

は之等の鎖國主義の諸邦國に入らんとして戸を叩いたのである。然るに今は彼等が吾等の戸を叩き、吾等が耶蘇を有するが故に、彼等は基督敎國に於て持つ所の知識と光とを求めて居る。

予は之等の叩く音の中でも特に强い二三の音に、諸君の注意を促がしたいと思ふ。

年來、之等の異敎國より吾等西洋の學問を學ばんが爲に千を以て數ふる程の學生が我國に來た。されば東部に於ても亦西部に於ても、諸大學を初め其他の諸學校に於て彼等は學んで居る。

予は我國の中西部の諸大學を訪ふた時に予を深く感動せしめた事を記憶して居る。其地方の諸學校に於て日本より、又數に於ては稍少ないが、支那、印度、其他の國々よりの一人又はそれ以上の青年の、時には女子も、學んで居るのに遭遇しないことはなかつた。之等の青年男女

は其國の上流社會の人々もあれば、又は身分あり勢力ある昔からの豪族に屬する人もある。されば血族關係から云ふても又其身分からいふても、彼等は其民族の將來に於ける勢力であり、又指導者であらう。

且つ彼等の多數は今日、日本に於て指導者と成つて居るといふ事は注意すべき事實である。實際彼等の數千人は數千哩を遠しとせずして世界を巡り、來りて吾等の戸を叩き吾等が持つて居るもので彼等が持つて居らぬものを求めて居るのである。

更に著しき事は輓近非基督教諸國の政府より視察員が米國に派遣せらるゝ事である。之等の派遣委員は續々と來る。其人々は其國々に於ける最も有力なる人々や、指導者の地位に立つて居る官吏などである。彼等は政府の選定によるもので政府の支給により吾等西洋の驚くべき進歩の秘密を學ばんが爲に來るのである。

之等の政府派遣員以外に吾等の文明を視察し、之を學ばんが爲に自費で來る勢力ある知名の人士もある。

未來の大指導者

此著しき運動の最も顯著なるものゝ一つは青年支那學生が續々として日本の諸學校に留學した事である。一寸の間に恰も約束した樣に一萬五千人の支那青年は東京に集つた。淘汰は止むを得ない事であつて多數は歸國したが、併し尙一萬人は殘つて熱心に一生懸命勉强して居る。

何故彼等が日本に行つたかを深く注意せられんことを望む。それはなぜかといふに彼等に取り、日本は新たなる生活に入りたる國にして、西洋の新光明と生命とを代表するものであるからである。即ち彼

等の隣邦なる此小さい、而かも偉大にして進取的の國民は西洋の基督教諸國の新文明を輸入したからである。

好機逸すべからずとして數百の學生は殆んど地球を一週して我米國にまで來たが、數千人は至つて近き日本に往つて此機會を捕へたのである。之等の學生は支那の各省よりのものであつて遠い西藏の邊境よりも數百人送られて居る。

彼等は數千哩の旅をしなければならないのである。支那に於ける交通の緩漫なることを考へれば吾等に取りては數千萬里に當るのである。幾百の青年は省廳より或は地方廳より送られ、又他のものは此目的の爲に募集されたる私人の寄附によつて來るのである。富める人々は其子供等を送つた、彼等が日本に往く理由は日本が其門戸を廣く吾等の基督教文明に開いたからである。彼等は其勝利者なる日本

に來たのではない、寧ろ日本が基督教國より輸入せる文明に來たのである。

基督教會の門戸に今日迄、之に類する戸叩はあつたらうか、支那の最良最英の青年、而も其國の各地を代表し、大部分は政府を代表する一萬人の選抜きの人々が、日本に移植された基督教的文明を專心研究せんが爲に數年間の歳月を費すといふ事は今日の教會に取りて驚くべき事實ではなからうか。吾等は安閑として居られぬ。つまり非基督教世界が吾等の裏門を叩いて居るのである。表門に廻るには餘り遠いそれで一番に近い便宜な戸を叩き始めたのである。

此等の諸國に於て宣教師等は、其人々より神と基督とを教へる人を送り呉れよとの熱心なる要求と歎願とを絶えず受けて居るのである。亞弗利加の眞中に於て、數村擧つて朝から晩まで數日に亘り、之が爲に

跪づいて祈つた、即ち神の福音の送られんが爲に天に向つて無言の祈りを捧げたのである。

朝鮮並びに他の國々に於て交通機關の不便をも顧みず數百哩を旅行し、甚だしきに至つては遠路を厭はず徒歩にて耶蘇の物語を宣傳する會合に出席するは敢えて珍らしい事ではない。

又吾等西洋の風習を摸倣し、自分等が持てるものを棄るといふ間接の叩き方もある。摸倣は敬意を表する最高の形態である。即ち摸倣は稱讃を示し、又其人の如くならんとする欲求を示すものである。保守的な東洋人が西洋の學問を輸入し、基督教國に於ける模範に從つて數千の學校を設立するが如き根本的の事柄は驚かざるを得ない。從來の惡習慣や教育の古き制度を捨てるは驚くべき事である。是までは反抗して居つた所でも、今は友愛的の模倣を見るに至つた。

之に加ふるに、年々亞米利加に百萬人の移住者のあることを思はゞ、之等の外國人に對して吾等が有する奉仕の機會は莫大なものである。併し希くは後者は亞細亞又は亞弗利加から亞米利加に來るのではなく、歐羅巴からだといふ事を記憶せられん事を望む。

彼等の要求は如何に大なりといへども、此人々は異教の人々ではなく、主として、名目上基督教化されたる歐羅巴人である。亞細亞人も大多數來るを欲するであらうが、其戸は官吏の手によりて、はや鎖され、堅く封せられて居る。

希くは異教世界の幾億萬の人々を一瞥し、心を沈めて彼等の聲に耳を欹てられよ。借問す、之に勝りて基督教會の門戸を叩く聲はあるであらうか。

何を求むるか

戸を叩いて居る事は疑ない。併し―併し何を求むるのであるか。明らさまに云はゝ、彼等は基督教諸國民を偉大ならしめたもの、世界の指導と世界の主權とを握るに至らしめたもの、夫を求めて居るのである。

外國人が英國の宮中に於て聞いた、あのよく引用さるゝ有名な返事を記憶せらるゝか。其人は英國の偉大なる事を深く感じて其秘密は何であるかと尋ねた。するとヴ＊クトリア女皇陛下は手を聖書に置き彼の記憶すべき言葉にて『之が英國の大なる所以の秘密である』と答へられた。

賢明なる女皇がどれ程の意味で之をいはれたか、予の知る所ではない。けれども英國の教會制度を指されたのでないことは確かである、

むしろそれ以上のもの、更に深いものを指されたのであつて、教會制度は其一つの發現に過ぎないのである。聖書の渡つた所、又英國に於けるが如く、聖書が人民の日常生活に深く透徹つた所に於ては道德的新生**と共に**―よく注意せられよ―**新心意的生活**をも見らるゝのである。聖書に精神の諸能力をも覺醒し更に西洋諸國の最も著しい特徴である**勢力の精神**を發揮せしめ又活動せしめたのである。

此二つのもの、即ち心意生活と著しき勢力とは、吾等が有する近世科學の基礎となつて居る。且つ之が吾等の驚嘆すべき發達の基礎となつて居るのである。之が西洋をして東洋と異ならしむる所以である。現に指導的諸國民は基督教諸國民である。旺んなる國民的生活の種子は基督の福音である。

異教世界が今日熱心に吾等の戸を叩いて居るのは之を得んが爲で

ある。予は彼等が此やうに考へて居るといふのではない。彼等は暗闇を手捜りで這ひ出て居るが、吾等の文明の燦爛たる光景に其目は眩く暈まされて居る。彼等は事の由來をも深く知らず、たゞ熱心に身を延して手を光に伸べて居る。其餘光はまた彼等を捕へて居る。

されば彼等は又基督教國の罪惡をも摸倣ることがあるとも敢て怪むに足らうか。此等の罪惡は基督教に屬するものではなくて、吾等基督教國民の中に殘つて居る野蠻の遺風である。是つまり彼等は餘光に捕へられたのであつて、飛んで火に入る夏の蟲の害を被ると異なる所はない。眞暗闇から急に燦爛たる光に出でたが爲に彼等の目が眩んだのである。

さりながら更に深い要求がある。心底切りに求めて居る所のものは、勿論最大多數は無意識であるが、吾等西洋の文明の根底に横はる所

のものである。彼等は此貴き聖書の眞髓なる基督の福音を不知不識求めて居るのである。之を得るに及んで、彼等は吾等をして基督教國たらしめたる所以の心意的生活の覺醒と、進取の新勢力とを生ずるに至らしめたるものは實に基督の福音なることを悟るに至るであらう。

訪問の答禮

彼等が吾等の戸を叩くは、吾等が彼等の戸を叩いた直接の結果であることを記憶せられん事を希ふ。遠い所に居る吾等の親族なる之等の人々は禮儀が正しい。彼等は只吾等の訪問の返禮をして居るのである。

大英國、亞米利加、並びに歐羅巴より派遣された宣教師は之等の外國傳道地に於ける西洋の通路探見者であつた。彼は欝蒼たる森林を切

開き中に狹き徒道を造つた。之は困難な英雄的な事業であつた。探見者は不撓の精神を鼓して進むに從ひ、生ひ茂れる荊棘に其手と顏とは搔裂れた。

それから外交が入つて、其道路を廣めた。次に通商貿易が速かに來り、其道を踏み均して旅行に都合よき固い良い道にした。それで宣教師等も此度は此廣々として良い道路を自由に使用するやうになつたのである。

今日此等の道路は他の人々の踏む所となり、反對の方向にも用ゐられる。今や之等の民族はもと教會が之を開き、外交と貿易とが之を改築したる通路を走り來つて、吾等が持てる物を與へよと吾等に求めて居るのである。之は吾等が主より受けたのであつて、主は吾等に命じて價なしに受けたものなれば價なしに與へよと言はるゝのである。

斯く來りて彼等は吾等の戸を熱心に叩いて居る正門の戸、裏口の戸、戸のある所ならばどこでも叩いて居る。諸君に其音が聞えませぬか。

あゝ今日の大問題は異教世界の問題ではなくして、基督教會の問題である—吾等は目前に投ぜられたる此好機會を捕へようか。今日福音を握つて之を掲げて居る基督信者の手の數よりも、耶蘇の福音を得んとして擴げて居る異教國人の手の數の方が多い。

又吾等のうちで異教國の人々の爲に、彼等が光を受けんことを祈つて居る人々があるよりも、之等の遠國で光りを與へられんが爲に無言の祈りを捧げて居る人々の方が多い—遙かに多い。

今日教會の最大問題は—開放された戸に入らうかといふ事である—之は又肝要な問題である。之に對する答の如何は吾等が論じて居る他の一切の問題を遺憾なく解決するに足るのである。教會が此問

題に對して遺憾なき又忠實なる答を與ふるに於ては財政に關し煮えきらぬ講壇の聲に關し、不注意にして冷淡なる信者に關し、敎會の空席に關し、並びに都市傳道に關する一切の問題は速に解決さるゝであらう。此事業は之を爲さば、而も能く之を爲さば敎會の生命全體に亘りて新たなる血液循環を促すであらう。

福音を受る方法は、內國に於ける と外國に於ける とに從ひ、段々甚だしく異がつて來るといふ事に氣が付かれたか。あちらでは眞理に心を開き、熱心に喜んで只之を信じ之を實行せんとして居る、即ち彼等がなす所は使徒行傳に書いてあることを思ひ起さしむる。然るに吾等の內國なる亞米利加、大英國、又は獨逸に於ては冷淡に甘んじ、又は逃げ口上を使つたり批評的に流るゝ風が見える。さればさま〳〵の疑問を解釋せんとして自然論的の說明などを求め、神の眞理の單純な力を

大部分失ふに至つて居る。

之と同樣の差異は兩所に於ける結果の上にも見らるゝ。此所で擧る所の結果は至つて僅少であつて、之を獲るは甚だ困難であるが、彼所では更に多くして又容易である。彼所には戶が廣く開かれ人々が群がつて入るが、此所には戶が鎖されて、却て人々が外の所に顏を向けることが早いといふ樣な感じを與へる。此所では福音の食物を饗應するに當り、種々な副食物をそへて出すのであるが、彼所ではパタも付けぬパン其儘が熱心に感謝を以て受けらるゝのである。彼等は饑ゑて居る。其饑が吾等に取りては、廣く開かれたる戶である。此妙味を知らんとせば吾等は外國旅行と云ふ運動をしなければならぬ、大いに之をしなければならぬ。

『我に行ひしなり』

吾等の戸を叩いて居る他の側面のことを極く静かに述べよう。叩いて居る人は何人であるか。あゝ何人であるか。

馬太傳廿五章にある耶蘇の言葉を記憶せらるゝか、耶蘇は世の終りに於ける落着期のことを話して居らるゝ。彼は驚くべきことを其處になし給ふ。彼は饑ゑたるもの、裸なるもの、貧しきものと己とを同一視し給ふ。云ひ換ふれば彼は其人々の代りに自らを置き給ふのである。彼等に對するは猶彼に對するが如くしなければならぬ。彼が言はるゝには彼等が食物と温かなる着物とを求むるは、實際**自分が食物と着物とを求め給ふのである**と。吾等が之等の窮乏せる人々に對するは實に彼に對するのである。人々に對して耶蘇が問ひ給ふ試驗的の問ひは―之等饑ゑたる人々に汝は何を爲せしか―といふ事であ

る。何故かといふに汝が彼等の爲めに行ひし所、又行はざりし所は我に行ひし所、我に行はざりし所であるからである。耶蘇は窮乏せる人の樣にて來り給ふのである。今日強く吾等の戸を叩いて居るは何人であるか。

耶蘇が今日實際ニューヨークに御出になつたと假定して見られよ、即ち今吾等に知られて居る所の彼が、昔人としてエルサレムに御出になつたあの人なる耶蘇が來られたならば―恐らく彼の爲に開かれない戸はなからう。彼は昔エルサレムに御出になつた時よりも、今日ニューヨークに於て更によく了解されて居らないかも知れぬ、けれども富める人の戸は直ちに彼の爲に開かるゝであらう。予のいふのは基督信者の富めるもの、敎會の富める者をいふのである、他の戸も亦疑ひもなく開かるゝであらうが、先づ此等の戸の開かるゝは受合だ、確が

に彼は大歡迎を受けられよう。

そして又思ふに、若しも亦彼が富豪の邸宅の並立する第五街やマデソン街の或る富る人の家庭に入り、其主人公に向つて支那か日本かに福音を宣傳する爲に百萬圓又は千萬圓を與へんことを求め給ふたとするならば其願ひは多分聞かるゝであらうと思ふ。多分そうだらうと思はれる。扨てどうかして諸君に了解して戴きたいことは、彼が吾等富めるもの、左程富まぬ者、貧しきものゝ戸にいつも御出になるといふ事である。實に彼は今玄關の戸を叩き、助けを求めて居らるゝのである。

之等の異教國人となりて、耶蘇は吾等に來り給ふ。吾等は彼に與へた―予は眞に恥かしいから極〻静かに之をいはふ―吾等は全體とは云はぬが吾等の多數は、吾等のズボンの衣嚢にゴロ〳〵して居る端下

金を與へた。實際はそうでもなからうが。時にはそうであらう。吾等は他のことの爲には更に多くを費すが、耶蘇の爲には着られなくなつた着物とか、穿れなくなつた靴などを寄附する。吾等の應答の大部分はこんなものである。されば此事を思ふて赤面に堪えず、又其責を免かれんが爲に何か口實を設けんとするは敢えて怪しむに足るまい。先般雜誌を讀んで居る時に深く感じた詩があつた。之は個人的の意味で書いたものであらうが、自分はもつと廣い意味があるやうに讀んだ。そして之は讀む毎に其意味が益々自分を打のである。

何人かゝ戸を叩いて入れられんことを願ふて居る、さて外なる聲は呼ぶ――

『友よ我に開け』。呼ぶは誰ぞ？

否とよ、我耳聾して岩の如し。

呼びを止めよ、　我は聞くまじ
汝の呼び望にも、失望にも、
汝は抑も何者なれば
我にその窮乏を訴ふるか。
饑ゑたり、食はしめよ、
旅人なり、宿らしめよと願ふや。

尙其聲は持續する——

『「友よ我足はいたく傷つく、
我に戸を開け我を慰めてよ。」
『我は開かじ。我を煩すな。
行けよ汝が道を痛手を負ひて、
我は起くまじ、開くまじ。

尙願は止まぬ——

『「さらば汝に關はりなきか。開けよ、見よ
汝に哀求めて佇むものを。

開けよ、いざ我は過ぎ去らん、
他日汝は我を招きて
恩惠を求め呼ぶとも、
我は聞くまじ、今の汝のごと。
我に開けよ。」
『我は呼びぬ。止めよ、
我を妨ぐるな。
恐るゝな、我汝に物請はんなど、
我を妨ぐるな、さなり、重れて煩はすな、
いざ起ちて我は我戸より汝を追はん。
何とよ！なぜに我にかゝはるや、
何なれば尙我を苦しむるや。
『然も終夜切りに呼びぬ——
「我に開け。」
尙其聲は我が耳に鳴りわたりぬ——

「起きよ、我を入れよ。」
涙を以て哀求む――
「我に開け、我汝に到らん爲に。」
夜露は降り夜はふけて寒さは一入身に浸みぬ――
「我足は傷けり、我顏を見よ、
見よ恩惠を授けん我が手を、
我心汝の爲に傷けり
我に開けよ。」
『かくて、夜明に至りぬ。
やがて聲は遠く去りぬ、
悲めるか如くいと靜かに、
やがてなげかるゝ如く反響して足音も我を過ぎ去りぬ。
足の運びもたど〳〵と進もいとど遲かりき。
明るく朝
我はみとめぬ草の上へ

血しほに染みたる足跡を、
更にあまたの血の痕は
我家の戸に充ち滿てり。』

之と同一の聲は不思議にやさしく尙聞ゆ――
『我此兄弟の最微者の一人に
行へるは、即ち我に行ひしなり。
『此最微者の一人に行はざるは、
即ち我に行はざりしなり。』（馬太二五ノ四〇、四十五）

急迫の事變

十月の恐慌
危險と勝利との睨合
靈の戰
怠慢と成功との危機
西洋化したる異教
力なき基督教
死か深淵か
救ふて救はる

急迫の事變

十月の恐慌

或る朝一人の男がニューヨーク市の下町に在る有名な銀行の階段を開門三十分許前に登り、其門前に立つた。二三分經つと、もう一人が來て其側に立つた。更に他の人々が一人々々來て、小さい行列を作つて戸の開かるゝを待つて居つた。

通りかゝつた用達ボーイは此常ならぬ樣子をすぐ認めた。彼はニューヨークに於ける有名なあの恐慌を知る程の年齢でもなく、又銀行の取附を見た事もなかつた、さりながらウォール町（蠣殼町の類）の用達ボーイであつたから、すぐさま、本能的に、其銀行に取附が始まつたと早合點し、直ちに走りて人々に告げたからたまらぬ。此取附開始の

報知が電話によつて速かに廣まつた樣は、いかなる山火事も之に及ばないほどであつた。恰も見る事のできないエーテルの波動の傳はるが如く、報知は電光石火の勢を以て、經濟界に擴がつた。銀行の頭取といふ頭取は直ぐ此事を知つた。更に之が全市に傳はり、尙市外にも擴まつた。

昨年の十月の恐慌と呼ばれたものはこんな風に始まつたが、之が直ちに全國に擴がり、進んでは全世界に及び、此國にある各國の銀行を始め、外國の各首府に至るまで、金袋の紐を締めるに至つた。

それは不思議な恐慌であつた、何が其原因であつたといふ事が出來ぬ。新聞や雜誌は色々の說明を下したが、其原因は尙不明である。饑饉があつた譯でもなければ、又旱魃があつたのでもない。此國の經濟界の主なる晴雨計となつて居る穀物の收穫も至つて豐饒であつた。

又工業界の生產過剩又は在荷過多でもなかつた。實に多數の製場所に於ては應じかぬる程の注文を受けて居つたのである。原因は全く人々の頭にあつたらしい。資本界の牛耳を取る人々と其人々の遣口に對する不信任の精神が現出したのであつた。斯くて、恐怖の感が、申合せた樣に、午前十時前に一銀行に數人を送つたのであつた。

數人の人々は列を作つて銀行の戸の開かるゝのを待つて居つたといふ常ならぬ樣子は枯草に火であつた。經濟界の恐慌といふ事を耳にするや否や、金は姿を隱し始めた。金錢ほど臆病なものはない、其次に臆病なのは學問である。大抵の人に取つては貯金程堅く握るものはない。魔法のやうに金は引出され、押入れの中に、天井裏に、又は金庫の中に隱されてしまつた。斯くて恐慌の餘波は速かに到る所に感せられ、恐怖を以て迎へられ、大危險は目前に迫つた。

多數の人々の、日常生活の規則正しき習慣は直ちに破られてしまつた。大藏卿は政府の補助と保證とを速かに與へん爲にワシントンの執務を捨てゝ、數日間をニューヨークに費した。銀行員並びに經濟界の指導者等は社交的の約束や其他一切の事柄を辭はり、此危急な事變に當らんが爲に全力を盡した。時間の儉約の爲め、食慾の缺乏の爲め、敏活なる思考と行動とを爲さんが爲め、頭腦の明晰を助けんが爲めに食事も碌々しなかつた。精神の興奮は頂上に達し、人々は終夜鳩首して善後策を講じた。

金力の牛耳を握つて居る一群の人々は、其内の一人の私宅に會合した、といふものは此人の強い人格と手腕とを期せずして慕ふたからであつた。青い元氣なき顔色にて、相談に夜を徹した事も一夜ばかりではなかつた。彼等は事變に捕へられたのである。襲ひ來れる危險を

免かれんが爲に生活の常習は無二無三に破られた。それは資本界に於ける事變であつて、憂べき危險に襲はれた爲め、他の一切の事は皆忘れられ、此危險を救はんが爲めに搾られ得るあらゆる資源は皆搾り盡された。幸にして此危險は救はれた、之は大成功であつた。勿論人々は今に至る迄其影響を蒙つて居るが、併し心配した程ではない。

危險と勝利との睨み合ひ

事變とは大危險が生命を襲ふ事であるが、若し其危險を捕へ之を征服すれば大勝利を博する事が出來るのである。危險と勝利とは互ひに怒りを帶びて睨み合ふて居る。大危險は飛びかゝらんとし、大勝利は之を捩伏んとする。勝敗の決は人に在る、即ち強い敏活な腕にある。勢力を集中し形勢を收攬する事が出來れば大勝利は日を瞭るよりも

確實である。さりながら形勢を一變せんとせば勢力集中の極度と、非凡の才能と、迅速確乎たる處置とに依らなければならぬ。手腕者なきか、勢力不充分なるか、興味乏しきか、或は此處置を取ることが出來なければ禍は到底免かれぬものである。

丁度こんな事變が吾等をも不斷襲ふて居る。家庭内の愛する者が重き病に侵されれば茲に危機が生じ、生と死とは病室に立つて睨み合ひをする。勝敗いづれに歸すべきか、何人も確言する事は出來ぬ。死を退けて生を招かんが爲に生活の常習を破り、一切の事を打捨て、打ち忘れて、盡さゞるはない。此危機が安全に過ぎ去れば、生命を拾ふた喜びは是迄費したあらゆる心勞と苦勞とを忘れしめて尙餘りがある。

己が財産上に事變が起り、之を挽回せんが爲めに自分の費用と家庭の經費とを極度に切詰めた經驗を思ひ出す事のできぬ人はなからう。

教師と兩親とは男女の青年期に達するまでに、兒童の生涯に時々道德的事變が生ずる事を認めて居る。兒童教育に最も大切な事の一つは此事變に注意し、之に處して誤らぬ事である。之が爲め如何なる注意と忍耐と洞察とが費さるゝかは、此經驗を嘗た人でなければ解らぬ。

靈の戰

事變は又靈界の事物にも起る。之が一番六ヶ敷して手におへぬ。人をして之を覺り之を捕へしむる事は甚だ困難である。多くの教會に於ては靈的事變が起つても之を正當に處置して居らぬ。教會は相變らず集りを開いたり、金を募集したり、之を費したりし、又其他御定りの事をやつて居るが、大切な生命がなくなつて居る。つまり手細工の電流で運動を繼續して居るのであつて、自由自在な生命運動はないの

である。

傳道界の指導者等は云ふ、かゝる事變は彼等の傳道にも生起することがあると。故に靈的諸勢力の奮鬪がなければならぬ。勝利はつまり指導者等が魂氣を盡して難戰苦鬪を經たる其結果としてのみ來るのである。

個人的實驗に於てもかゝる危機が生ずるものなる事を吾等は知つて居る。又祈禱によりて事物を變更する事を知れる人々に向つて事變が時々來るといふ事を話す必要はない、又事變に遭遇するに當つては如何に身構をかためたり、祈りの土臺となつて居る神の約束を新たに感じたり、信仰を新にしたり、日常の業務の間にも祈の精神を盛にしたりすることの急務なるか―日常の務の忙がはしき時にも靜かに心の願を神に告ぐることを怠らず、危險が去り、勝利の確證を得るまで

之を務むるの必要は云ふ迄もないことである。

歷史上の大事件は大概事變に關聯したものであると云ふことは隱れもないことである。歷史の中心的事件であつた基督の死は最大の敬意を以て、一個の事變的行動であつたと云ふことが出來る。彼は吾等の救の爲に其貴き血汐を流し給ふたことは世界の基が置かれざりし先より知られ、又考へられ、目論まれたる事ではあつたが、尙之は罪に因つて生じたる危機に基く大事變であつたと考へなければ、彼の死は到底充分に了解する事は出來ぬ。

偖て耶蘇が吾等の手に委ねられたる世界的福音敎化の此大事業の前に目下横はる所のものは此種のもの、所謂事變である。諸君のうち或は目を圓くして―實際そんな事變に遭遇して居るか―と問ふ人があるかもしれぬ。予は人々が『危機』とか『事變』とかいふ言葉を

好まぬ事を知つて居る。事物が滑かで又都合がよいと考へるは大層氣樂なものである。人は萬事思ふやうでなくとも、それが都合よくなるだらうと考へる事を好む。此一種の樂天主義は極人氣がある。事物は結局好くなると吾等は考へたがる。さりながら大切な事は、事物がひとりでによくなるものではない。誰かゝ之が爲に自分の心と生命とを捧げて斯くならしめなければならぬのである。

疑ひもなく此外國傳道事業に關して、事變が、而も大事變が起つて居ると云つて可い。勿論或意味からいふと、此處に事變が何時でも起つて居るといふ事は眞理である。吾等の同胞なる之等外國の數千の兄弟等は日々死に瀕して居る。光明を送つてたならば彼等の狀態を改善することは六ヶ敷はなかつたらう。さりながら、吾等は光明を送らなかつた、それで彼等はいつも間違た方ばかりを選んだが爲に神より

永久に離れるといふ黑雲が彼等一人々々の上にかゝつて居るのである。彼等が神の生活より離れて居るといふことよりも、更に暗澹たる事はなからう。

怠慢と成功との危機

然るに之と全く趣を異にし、又之に加へて、かくいふても間違はなからう、即ち異敎諸國に於てこれまで知られなかつた樣な事變が今や生じかゝつて居ると。之は吾等の有力なる宣敎師等の成熟した判斷である。

吾等は之等の指導者のうちに有力なる人々を有するといふことを記憶すべきである。外國傳道に從事して居る人々、又內にありて傳道會社の舵を取つて居る人々の中に、最も優れたる能力と天才とを持て

るものがある。今日此大傳道事業の爲に其生命を與へて居る人々の中には政治家的の才能と力量とを有し、公人として、外交家として、又特殊の事務家として容易く第一位を占むべき人々、又大統領の椅子をも滿し、又之を遺憾なく滿たし得る人々がある。

此人々が各方面より觀察したる眞面目な判斷によれば、現在は未曾有の事變に遭遇して居るのである。それはあらゆる外國傳道地中最大の場所なる亞細亞に特に存して居るのである。今日の危機、即外國傳道の危機を生ずるに至つた原因は種々な事柄が非常な勢ひを以て一つになつたのであつて、今日に至る迄に起りたる、又恐くは此後起るべき最も憂ふべきものであらう。將來の事は今後二三年間に大略決するであらう。

之等一切の事變の根底にあるものは云ふまでもなく最大の要求である。之を眺むれば巨大にして窶て幽靈の樣に見える。

教會が數百年の間怠り勝ちであつた事は目下の形勢を大に危からしめて居る。主の御計畫は明かに、いづれの時代に於ても教會が其時代即ち其當時に於ける天下の萬民に福音を傳ふることであつた。いづれの時代の人々も新たに福音を與へられなければならぬ。新たに福音宣傳の必要を感せざる國はない。基督教國なる亞米利加にして、若しも其教會と福音とを失ふたならば元の異教の狀態に復歸するは日を見るよりも瞭かである。

然るに實際數百年間は、何等爲す所もなく空しく送られた。無爲に過したる之等數百年間は現在に積み重なり、斯くて過去になさゞりし事業は今日の業を益々困難ならしめて居る。今日の形勢の斯くも不自然なるは過去に於てなすべきを成さなかつたからである。

然るに現今に於ける成功が又今日の事業に關係をして居る、即ち近世宣教的活動は大に此事に關係して居る。過去百年來の宣教事業は驚くべき絶頂に到達して居る。教會の指導者等並に宣教師等の花々しき働きぶりは、今日之と歩調を共にせんとしてゐない教會若しくは教會員に當惑の感を懐かしめて居る。之は成功の事變といふべきものであつて効果ある事業の當然の結果である。比較的小數の人々によつて、此事が成就せられ、且ついかにも立派に成就せられたのであるから、今吾等は大に之を成就せなければならないのである。

異教諸國が覺醒したから事變が生じたのである。彼等の覺醒は吾等を督促するのである。吾等が彼等を醒したのである。之まで立派に成就したから、之から尚一層力を入れて立派に成就しなければならぬ。實に吾等は彼等を醒したが―何の爲に之をしたか。實業家等は

吾等が外國傳道地に於ける復と得がたき機會を空しくするは愚の至りであるといふてもどかしく思つて居る。

西洋化したる異教

偖て目下急迫の此事變に關して少し考へて見よう。重大な危險に瀕して居るが大勝利も亦可能である。

先づ第一に新しい進擊的異教といふ眞實な危險である。即ち之は異教諸國に於ける新たな、勢のある、且つ顯然たる非基督教的文明である。思慮に富み世界的運動に着目して居る人々は、東洋に於て人類の新指導者の起るべき事を信じて疑はない。それは異教の指導である かもしれぬ。此危險は明かにありうべきことである。此新世界の指導は肝腎な基督教民族が有する一切の偉大なる勢力と、明晰な頭腦と

を有しながら、而も基督教の精神をぬきにしたものであるかもしれぬ。

實際之は眠つて居るのではなくして覺醒したる新異教。西洋諸國民によつて引廻さるゝのではなくして、自分で振り廻し、又切り廻すのであらう。西洋諸國民のあらゆる科學と、發明心と、不撓の精神とを有する、醒めたる、組織の整うたる、勢のある異教諸國―而も古い、神を信せざる、基督のない異教が其新生命を支配するに至る、之が危險なのだ。

異教諸國は永き歳月の眠りより遂に目を醒し、起き上り、目をこすりながら吁々して居る。彼は新生命に入らんとして居る。此事は晴れ渡れる朝に日光を見るよりも明かである。此生命は果して如何なるものであらうか、之は全く基督教會が目を醒すか否かによる。もつと手短にいはゞ諸君と予とがすぐ今、目を醒し、容易に可能る事を爲すか否かによるのである。吾等の爲すと爲ざるとによりて、それは耶蘇の

貴き教と精神とが貫徹する新基督教的生命となり。又は勢のある西洋化したる異教の新生命となるかもしれぬ。彼等はいたづらに吾等の勢力と心意の覺醒とを求め而も其本源なる所の基督教の精神を失ふたるものとなるかもしれぬ。

之等二個の相反對する事物は互に睨み合つて居る。勝利はいづれの手に歸するであらうか。之を知るものは誰であらうか。教會が失敗したならば……。之こそ重大な眞の危險であつて、最も知識あり、最も英敏な觀察者が氣が付いて居るよりも更に重大にして恐らくは更に危險なるものである。

力なき基督教

踵を追ふて來る第二の危險がある、それは既に明かに感せられてゐ

る。**之等の人々は、無力に見える基督教から逃れ去るかもしれぬ。**彼等は基督教の簡單な原則を熟知するに從ひ、吾等が其原則に眞實從つて居らない事を覺るかもしれぬ。吾等の主は吾等に命じて到る所に往きて萬民に主を傳へよ、又之を爲すに當つては吾等の生活に訴へるに優りたる事はないといはれた。けれども吾等は之を實行して居らない。過去千九百年來の教會は、全體からいはゞ、之を實行しなかつた。今日の教會も亦、全體からいはゞ、之を實行して居らぬ。

宣教師等は次のやうな問、否寧ろ非難に耳を傾けなければならぬことは一再のみではなかつた、『何故貴殿はもつと早く御出で下さりませんでしたか、私の親も私共が今頂いて居る光を求めて居りまして御坐ましたが、遂之を認むる事が出來ずに亡なりました。なぜ貴殿の父君が御出でになつて、私の父に御話し下さいませんでしたか』。若し

吾等の信仰が吾等の生活を支配するまで充分に徹底して居らぬことを、彼等が覺らば、それが異教の信仰を去る果して幾何なるか、果して實行の力を有するかを疑ふに至るは當然であらう。

理窟の上からは勝つて見えても、實際上何等の力なき一片の理想に過ぎぬものと思はるゝであらう。勿論かう考へるのは彼等が間違つて居るのであらう。けれども事物を深く考へない凡俗に取つては、より自然な結論はなからう。基督を受くるに邪魔となる種々の困難を發見するに及んで人は全く之を捨てゝ顧ざるに至るは當然の事である。

一人の支那人が米國に於て或上流の教會に屬する家族に往つて働き口を求めた話がある、其家の人が尋ねていふ―。

『お前さんは酒を飲みなさるか。』

『いえ、私基督信者あります。』

『お前さんは賭事ごとをなさるか。』

『いえ、私基督信者あります。』

彼は雇ひ入れられ、よく立ち働いた。間もなく其家の主婦が人々を招いて骨牌會を催ふし、其饗應に酒を用ゐた。支那人は何氣なしに務めを濟したが、明る朝主婦の前に進んで言ふた。

『私やめる思ひます。』

『なぜ。なんのことです。』

『私基督信者。先日私そういふた。異教徒ありません、メリケンの異教徒家に働くいやあります。』

吾等が同胞なる之等の異教の兄弟等は愚物ではない。彼等は中々賢い、吾等が彼等の行ふ所によりて彼等の宗教を判斷する樣に、彼等も

亦吾等の行ひによりて吾等の宗教を判斷して居る。人の生活を變化し、又實際に其行爲を支配する力が實際基督のうちに存するを、一般に信ぜざる樣になるかも知れぬ。それは彼等が吾等基督教國民全體として爲す所を觀察するに當り到達する所の極めて當然な結論であらう。

死か深淵か

次に極て大なる危險が他の一方の側、即ち吾等の側にある。若し如何なる時代に於ても福音は要求されるといふ事が眞であるならば、如何なる時代の基督教徒であつても福音を與へなければならぬといふ事も眞である。他人の爲に熱心に事へて己を與へるといふことは基督信者たるものゝ眞生命である。基督信者にして之をなさないもの

は其基督教生活に於て下り坂を歩んで居る人である。若し吾等が進取即ち『往きて』といふ精神を失はゞ基督教の新精神そのものを失ふのである。不從順な教會は死んだ教會となるであらう。心臟麻痺で死ぬであらう。基督教會に『爾もし悔い改めずば我なんぢに到り、爾の燈臺を其處より取除かん』（默二ノ五）といふたのは人を射る焰の目と、鋭き劍の舌と、火を通りたる足とを持てるヨハネが書いたのであつた。燈臺は光ではない。それは光を支持るものである。教會の大使命は世界の光を支持るものとなることである。

然るに時としては心を撮まない蠟燭とか、蜘蛛の巣がはつた窓などが見える樣だ。或國々に於ける基督教會は確に其奉仕の特權を失ひ、又其生命をも失つて居る。古い形態は殘つて居るが、生命は皆去つて居る。正に重大な危險が現今亞米利加の教會並びに英國の教會を襲

ふて居る。

久しき以前、まだ蒸氣を航海に用ゐない時のことであつたが、大きな船がリバプールを指して永き航海の後、セントジョルヂ海峽を上つて來た。水先案内が上船するや、出しぬけに船長に叫んだ『なんのつもりですか。ウエールスの海岸淺瀨の方に流れて居ます。船員を召集して下さい。』船員は直ちに召集された。水先案内は言葉少なに危險を告げ、それから聲に力を入れていふた。『大帆を上げよ死ぬか深淵か だ。』苦心慘澹漸くにして船を救ふた。

若し予は今日教會の傾聽を受くることが出來るならば、之に對する深き親切からして、あらん限りの根氣を出して大呼しよう『死か深淵か、又は破船の死か。』世界を導く此聖き奉仕の深淵

救ふて救はる

之よりも更に重大な危險が襲ふて居る。利己的の動機に訴へるは極普通の事である。例へば禁酒事業が近年長足の進歩を爲したるが如き、多くは利己的の動機より出でたる立法上又處世上の必要に基因するのである。高尚な道德的の動機よりも、寧ろ經濟上の動機並に家庭に接近する飲酒店の不快にして有害なることが、却て大なる勢力となつて居る。いかなる動機に基づくといへ、兎にも角にも惡い商賣の癈るは喜ばしいことである。

偖て、予は茲に一歩退いて、更に重大なる危險の襲ひつゝあることを諸君に御注意したいのである。それは吾等が自慢して居る基督教文明と基督教國の諸君とを支配して居る所の異教化したる基督教の恐ろしき危險である。而して結局之は吾等の財布に偉大なる災を釀す

所のものである。

云ひ換ふればそれは基督教の柔和にして美はしい感化力を失ふたる勢力と、此世の所謂明晰なる心意作用を基礎としたる生活とであるかも知れぬ。輕々しく攻勢を取つても重々しい所が缺けてゐよう。不注意な活動をやつても更に深い手強い所がなからう、敏捷であつても眞正の生命に觸れて居なからう。換言すれば吾等がもし異教國を基督教化しなかつたならば、彼等の方で基督教國を異教化するといふ恐るべき結果を生ずるであらう。

斯る影響の來るは一の隙間からばかりではない。マホメット教は既に大英國に於て擴張運動を開始して居る。異教の楔は其尖端を吾等の國に打込んで居る。されば時と共に其影響は益廣く、吾等の道德的纖維全體を侵し、又吾等の國民的生命の全局に及ぶであらう。

先般ポンペイの遺趾を發掘するに當り一つの發見があつた。それは跛な小供の身體であつた。所が其身體に婦人の腕が、綺麗な寶石を以て飾られた恰好のよい腕が廻はして在つた。此發見物は無言のうちに其單純な話を語つて居る。火山の爆發で群衆は避難した、跛な子供は逃げやうとしたが走られぬ。女は之を見て心動き之を援けんとして手を延ばした。不幸にして兩者は火流の追求する所となり、其下に葬り去られたのであつた。他人を救はんとして延ばしたる腕が助つた、此腕のみが助かつたのである。此大膽なる救助者の身體の他の部分は皆失はれた。只人を救ふた大部分のみが救はれた。他人を救はんが爲めに憐を催して延ばしたるものゝみが救はれたのである。

敎會であつても個人であつても、利己的に己が生命を救ふものは之を失ひ、他を救はんが爲めに熱心に其生命を忘るゝものは却て之を救

ふものであつて、且つ其生命を更に新に更に豐かならしむるものである。

上述のものは吾等を覗いて居る諸の見憎い暗黑な顏の二三である。然るに其眞中にもう一つの顏が見える。それは眼光人を射るが如く、目眩くして注視することの出來ぬ顏である。此顏は襲ひ來るあらゆる危險と困難とに打勝つ顏である。數多の人々は正々堂々の陣を張つて此事變に對するに於ては勝利は確實にして動すべからざることを信じて居る。さりながら今注意すべきは之を能せんとせば先づ目下急迫の事變を手强く、且つ見事に捕へなければならぬことである、之を能して始めて之が成就さるゝのである。

嗚呼　神よ願くば爾の敎會が—吾等爾の敎會を構成て居るもの、即ち爾の敎會である所の吾等が、耶蘇の御爲め、人の爲め敎會の爲め、又吾

等自身の爲めに、此事變を認め之を捕へることを得しめ給へ。基督の聖名によりて願ひ奉る。

過去の失敗

神の失敗の二三

失敗の責の歸する所

神の主權

教會の使命

『基督も亦待ち給ふ』

『何人か忘れるのでせう』

過去の失敗

神の失敗の二三

神は時々失敗し給ふ。云ひ換ふれば神が爲し給ふ所、神が心に掛け給ふ所の計畫は失敗する。

エデンの園は神が人間の爲めに計畫し給ふたのであつた。雜草なく、荊棘なく、頗る美麗にして豐穣なる世界の樂園、男と女とが強き自制と純潔とを有て共に住み、彼等の子供等は斯る大氣中に成長し、最高最良の訓練を受け、地球は其一切の驚くべき諸勢力と共に人間の開發する所、支配する所となり、人と一切の造られたる生物獸及び鳥との親交の情と協同の念とが存在してゐる、茲に神は親しく人間の一切の事業に干與りつゝ人と共に歩み給ひ又働き給ふ—是神が人の

爲めに計畫し給へるエデンの園であつた。併しそれは失敗に歸した。

イスラエルに關する計畫も亦失敗であつた。神がイスラエルを特殊の民族たらしめんとし給へる主なる目的は現今に至る迄失敗して居る。其計畫によれば此民は本來天然の儘の土地に簡易生活を營める遊牧の民であつた。彼等の政治は人民の投票によりて萬事を治むる民主政體でもなければ、又は選擧された代議員の投票によりて治めらるゝ共和政體でもなく、又は專制君主の意志によりて治めらる王國でもなく、寧ろ之等一切のものと全く異りたるものであつて人々が悅んで神政と呼ぶ所のものであつた。

云ひ換ふれば、彼等一切の國民生活を發揮する上に於て、神御自身が統治者となつて彼等と共に働き彼等を指導し給ふのであつた。彼等は之等諸種の政體の各々に於けるあるとあらゆる最良なるものを結

合し、而も之等のいづれに於ても人々が知らなかつた所の或ものを之に加へたのであつた。

彼等は他の諸國民とは全く違ひ、政治上に於ては全然野心を有たなかつた、即ち彼等は他國をして彼等に對して戰を挑ましめず、彼等も亦他人に對して戰を挑むことはなかつた。彼等の大使命は全地球に對し精神的の大眞理を敎へ、更に進んで之等の眞理を彼等の個人的並に國民的生活に體得することによりて之を全ふする敎導的國民となることであつた。

此計畫は失敗した。他の諸國民の燦爛たる有樣は彼等をして神の計畫より離れしめた。斯くて彼等は諸國民のものと大差なき王國を建設するに至つた。

彼等が神と共に働いた間は、神も亦彼等と共に働き給ふた。神は侵

略と壓迫とによることなくして、其支配と祝福とが全地に普及すべき大王國を計畫し給ふた。彼等が晩年の文學は來らんとする王と王國との榮光を以て充ち滿ちて居る。さりながら愈王が來り給ひし時に彼等は彼を退ぞけ、遂に彼を殺してしまつた。斯く彼等は偉業を成就せんとしたる其間際に失敗をした。つまり神の御計畫が失敗したのである。希伯來民族は、國民として彼等が造られたる直接の目的といふ見地から云はゞ、今日に至るまで失敗であつた。

神が彼等の最初の王としてソールを選び給ひしは又失敗であつた。彼ほど整然たる準備と有望な前途とを以て生涯を始めた人、又王位についた王はないが、又あれほど大失敗に終つた生涯もない。神の此人に對する計畫は失敗したのである。

ユダに對する耶蘇の計畫も失敗であつた。ユダの生涯に於て、可能

の善と實際の惡との對照はあり〳〵と最も驚異すべき樣に於て結合されて居る。彼は其最も强かるべき點―彼の主に對する忠義―に於て失敗した。

ユダが人を惹き付ける性質を有するが故に耶蘇は彼を十二使徒の一人として選び給ふたことは疑はれぬ。ユダは其爲人に於ては第四福音の著者にして基督をよく知りたるヨハネに似て居つた。彼は又初代敎會の大膽なる指導の任に當つたペテロの如き者となつたかも知れぬ。

さりながら、いとも憎むべき卑怯な振舞を演じた其時まで、親しき敎導と愛撫とを辱うしたにも拘らず、耶蘇が及ぼし給ひしが如きかゝる感化にも應ずることをしなかつた。耶蘇はユダを使徒となさんと計畫し給ふたが、ユダは匪徒となり、謀反者となつた。彼は福音の指導者

教師たるべきものであつたが、彼は非難の標的となり萬人呪詛の通用語となつた。かく耶蘇の計畫は失敗に歸した。

失敗の責の歸する所

失敗はいつも人が神と共に働くを好まざるが故に生ずるものなることをよく注意せられんことを願ふ。神の御計畫には必ず二つのものが必要である―神御自身と人間と。神が爲し給ふ凡ての働きは人と共に爲し給ふのである。神が人の間に働き給ふに當りては人と共に働くことを欲し給ふのである。

或熱心な人々は神が時々失敗し給ふといふ、露骨な叙述を好まない。彼等はそれは神に責任を歸することの樣に思ふ。彼等は又それは崇敬の意を害ふことゝ考へるかも知れぬ。さりながら若し之等の人々

がもう少し深く眞理の根底に徹して考へるならば、責の歸する所は外にあることを發見するであらう。

責めはある。正直な働と忠實とを以て、失敗を防ぐことが出來るのであつたならば其責はまぬかれぬ。茲に責が存するのである。さりながらそれは神に在るのではない、人にあるのである。神の御計畫は人に依る。神の御計畫を失敗に終らしむるものは、いつも人が爲すべきの務を忠實に爲ないからである。つまり人の失敗である。

僞りの敬虔といふことがあつて、神の事をあきら樣にいふことを恐る丶。此僞りの敬虔はいふべきことをも控へ、又何分都合よくいはふとして種々と考へ出した言葉で他人のことを云ひ、神のことを繕ろはんとするのである。抑も眞の愛に二つの特徴がある。それはいつも言ふべき時にあらゆる眞理を隱す所なく話すといふことゝ、又それは

いつも敬虔の念に滿されて居るといふことである。これは斯くなければならぬことである。一言すれば卒直な言葉と、深き敬虔の念とを融合したものである。神を防禦する必要はない。明白な眞理に云譯は斷じて無用。

其事を云はゞ神の性格を傷つくるなどゝ思つて眞理を云ふことを控へるは僞りの敬虔である。斯る僞りの敬虔は蔽べからざる障害物である。それは眞理を抑さへ、又眞理は吾等の注意を喚起して、吾等の鈍き頭腦に之を徹底せしむべきものなる事を高潮するを妨ぐるものである。吾等人間は明白な眞理を嚙み碎いて最も呑込易き言葉で之を告げなければならぬ。最も深く、最も單純な敬虔は通俗な言葉を要求するものであつて、又かゝる言葉に表はるゝのである。神の眞理を抑へるは不敬虔である。何故かといふに人は之によりて神に關して

間違つた印象を受けるからである。不敬虔なると共に又不公平である。神學は此神の失敗といふ叙述をして神の性格を傷けざらしめんが爲に隨分時を費ひしたこともある。さりながら眞理を露骨に又明白に語るは神の大なる智慧と、清潔と、違はざる愛とを最もよく知らしむるものである。

神の主權

『神の主權』に關する教訓は澤山ある。此語は如何にも奇怪千萬にして漠然たるものであるから、赫々たる日光を以て之を照さなければ解らぬ。神の主權は通例神が己が意の儘に事物を處理し給ふ暴力の如きものと思はれて居る。人が神の御計畫の途上に立たば、それ程人に取つて惡いものと考へられて居る。神の主權は銃劍をつけ密集し

て進軍する大軍の様なものであるから、途中で之に出會するに際しては、をさ〳〵注意を怠つてはならぬ、さもなくば踏み潰されるかも知れぬと思惟されて居る。

予は神學者等がこんなに露骨に云ふたり、又説教者がこんな風に説いたりすると云ふのではない。只予が普通の人々と話をしたり、其人人の言ふ所を聞いたりするに、其人々がこんな風に感じて居るやうに思はるゝと云ふのである。それから又此主權と云ふ語はまことに殘念なことには神の御計畫に反する人々の過失や、怠慢などを掩はんとする宗教的の外套の代りに度々用ゐられて居る。

神は主權者である。神の主權といふ眞理は神の此貴き聖書に記された眞理の中で最も惠に富めるものゝ一つである。即ち神の最も深き恩惠の御目的と御計畫とが結局勝利を博するに至ると云ふ意味で

ある。又吾等が個人的生涯に於て神は吾等の祈に耳を傾け吾等の爲めに最良の結果を生せしめんが爲めに其大なる忍耐と智慧と力とを以て様々の事情と困難との紛糾錯雜を貫きて働き給ふと云ふ意味である。

尙又神は、其御性格に適したる政策と忍耐とを以て、人々の意志と之に反對なる事物とのもつれたる絲を以て、或は之を解きて善を生せしめ―惡から善を生ずるのではない、それは不可能、寧ろ惡にも拘はらず善を生せしめ給ふのである―結局あらゆる反對は征服せられ、又は弱り果てゝ消え失せ、かくて彼が愛の目的は充分に勝利を得るに至るであらうと云ふ意味である。

然るに差當り、深く心に銘すべき實際的の事柄は、吾等が神の御計畫を妨ぐることができるといふこと。神の御計畫は、吾等が彼と共に働